

アカム武器なめんな。

糸遊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※過去編の話を始めました。

驚異的な攻撃力、圧倒的な会心率。

そしてこれまた（逆の意味で）圧巻の切れ味。

霸龍の素材を用いて作られたその武器群は破壊力はトップクラスなもの、あまりの  
扱いづらさに愛用しているハンターはお世辞にも多くは無かつた。

だけど、俺はアカム武器を使い続ける。

そこにロマンがあるから。

※この作品は作者が本腰を入れて進めて いる作品の合間に、 気分転換で更新される予定です。ご了承ください。

# 目次

第1話	攻撃力370	会心率45%	
切れ味レベル+2で青ゲージ10			96
1			
第2話	それでも刃薬なら……刃薬なら		
きつと何とかしてくれる……!!	—	9	
第3話	達人ビルと薄幸美人	—	
第4話	霸爆砲で“しゃがめよ。”	21	
32			
第5話	無属性双剣(笑)	—	
第6話	下克上に下克上	—	
第7話	滅龍ビンなめんな。	—	
第8話	物理がダメなら榴弾ビンでいい	67 53 42	

じゃない。

第9話	はきゅん、ほうきゅん、ずつきゅ	—	76
くん			
第10話	はぴーならできる。そう、は		
ぴーならね。	—	121	
第11話	物理がダメならフルバースト		
でいいじゃない。	—		
第12話	横行霸道	—	
第13話	霸を見てせざるは浪漫無きなり	147 132	
昔話	—		
り	—		
174 161			

1 第1話 攻撃力370 会心率45% 切れ味レベル+2で青ゲージ10

## 第1話 攻撃力370 会心率45% 切れ味レベル+2で青ゲージ10

「アンタもモノ好きねえ？。なんでそんなナマクラばっかり使うんだか？。」

俺の相棒である隣にいる女ハンターが、俺の背中の大剣をみてそんな言葉を呟く。

「アーッハッハッハ！」

……それ以上この武器をバカにしたらこやし玉投げるぞ？いいか？本当に投げつけるからな？」

そこまで言うと、ウカムX装備を身につけた彼女は溜息を吐きながら黙り込んだ。

「じゃあ逆に聞くが、そんな金ピカのサーフボード扱いで『私ってばかわいい！』なんて思つてるのか？」

そんなサーフボードは周りの奴らがみんな装備してるわあッ！  
なーにが『真名ネブタジエセル』だ！  
ネブタ祭りってか!? 全然面白くないわ！」

そう言い返すと彼女は呆れた様に頭を抱える。  
ふつふつふ。何も言い返せないようじやないか。

この勝負、俺の勝ちだな！

「ああ…、このバカと話してると本当に疲れる…。

あ、ほらいたわよ。貴方の大好きな金ピカゴリラ。」

「なぬうつ!? よし、こうしちゃいられねえ！

ウルスもなにボサツとしてるんだ!? 早くいくぞ！」

そんなお喋りをしているうちに俺の大好きなムキムキゴリラが現れた。

3 第1話 攻撃力370 会心率45% 切れ味レベル+2で青ゲージ10

「今行くよおおおおお！」

待つててねえええええ！俺の大好きな全身弱点ゴリラさああああん！」

「ずえりやああああああああ！！」

相棒に向かつて口からビームをぶつ放してゴリラの後脚めがけて溜め斬りをぶち込む。

ゴリラはダメージに耐えきれず、転倒した。

「ウホッ！いいケツしてんなあつ！弱点特効が好みのいいケツだぜ！」

俺が炎のクリティカルをぶち込んでやるから覚悟しやがれえっ！」

すぐにブレイヴステップで近づき、横殴り、そして強溜め斬り。その全ての攻撃に会心の手応えを感じる。

「ムツハーーーツ！この手応え、たまんないねえ！」

まったく…ゴリラのケツは最高だぜ！」

ふと相棒を見ると、手を顔に当て空を仰いでいた。  
体調でも悪いのかね？

「おーい、ウルスー。体調悪いんなら無理すんなよー。」

「そんなんじや無いわよ…。ああ…もうヤダコイツ…。」

大丈夫みたいかな？そんじやあ俺は遠慮なくやらせてもらうぜ！

「くらえやクソゴリラアアアッ！」

もう一度、俺にそのケツ晒しやがれえええええ！」

「ふいーつ！今回もいい狩りだつたぜ！クリティカルがバンバン出るのは気持ちいいねえ！」

ゴリラを倒し終わり、俺達はベルナ村でゆっくりしていた。

「いやあ、やっぱアカム武器はいいよなあ！この破壊力はロマンの塊だぜ！」

「ああ、全くだ。まさか俺と同じ価値観を持つてるハンターがいるなんて思つても無かつたからさ。」

俺は加工屋のオツちゃんとそんな話をしていた。

「最近は、狩技の普及によつて切れ味を維持するのも難しくは無くなつてきてるからね。」

頭の痛かつた問題の一つである、切れ味関係のカバーが楽になつた。

それに『鈍器』スキルなんても普及してきてる。

アカム武器にとつては追い風だよ。」

「ふーん…。まあ知らんけど、アカム武器は強くなつたつてことなんだろ！」

「ああ、そうさ。一流ハンターに大人気の大剣は『真名ネブタジエセル』だけれども、君の持つている『霸神剣イクセエムカム』は条件次第ではあの忌まわしいサーフボード

を超えることだつて難しくないという計算結果も工房で出されたしね。」

「へえ…。加工屋のおじさんがそういうなら間違ひはないのね…。」

正直信じられないわ…。」

「うん、ウルスさんがそう思うのも無理はないだろう。

カタログスペックだけみたらネブタジエセルは相当なものだ。  
安定性ならピカ一だろう。

だけど…、最近はみんながその武器ばっかりだ。

『大剣の装備は?』なんて聞いたらどいつもこいつもブラックX一式にネブタジエセル  
さ。嘆かわしい話だよ。

そんな中で、アカム武器を使うカルム君が俺の前に現れた。  
これはもう運命だと感じたね。

僕のもてる力を全て注いで、カルム君のために頑張ったよ。

今ではカルム君は『霸王』なんて称号を持つてくれた。

これより嬉しいことはないな。」

「いや、オツちゃんのアドバイスがなければ俺だつてここまで来れなかつたさ。  
前は弾かれてばっかりで、使いにくさは感じてたしな。

狙う部位なんかのアドバイスをもらえたから、俺は頑張れたんだよ。」

「そう言ってくれて嬉しいよ。それじゃあ、そろそろ乾杯をしようか。

カルム君、掛け声はいいかい?」

「ああ、ばっちこいだ! それじゃあ……せーのつ!」

「「グラビモスを許すなッ!」」

そんなちよつと変わった掛け声と共に、達人ビールの入ったジョッキが打ち鳴らされた。

隣でウルスが頭を抱えていたのは気にならないでおこう。

第2話 それでも刃薬なら……刃薬ならきっと何とかしてくれる……!!

『難攻不落』

そんな言葉を表現したようなモンスターと俺は戦っている。

斬りつけた時の感覚は例外なく浅く、むしろ弾かれる時の方が多い。

「ハハッ……やるじやねえか……！」

けれど、俺もコイツを使っている時に負けるなんてのはまっぴらゴメンなんでね……

！」

残り時間も迫つて来ている。

……だけど

まだあわてるような時間じやない。

最後のラツシユのために、俺は白い色の薬液を取り出す。

時間はギリギリ。

それでも仙d、刃薬なら……刃薬ならきつと何とかしてくれる……!!

俺の片手剣が刃から白い炎のようなオーラを吹き出す。

「さあいこーか」

11 第2話 それでも刃薬なら……刃薬ならきっと何とかしてくれる……!!

「いこーか、じやないわよッ！  
アンタ、流石に頭湧いてんじやないの!?

?????????????????????

宝纏に切れ味よくない無属性片手剣で来るとかキチガイもいいとこだわ!?」

「うつせーよ…俺だつて本当は霸撃槍とか霸壞斧で来たがつたわ!」

だけど、この間のグラビモス大量発生でウチの固定ダメージ武器ちゃん達はヘトヘトなんだよツ!

ガンランスとチャアクは敏感な武器なんですよ!?もつと優しくしてあげてよ!?ねえ!?グラビモスな季節なんざクソ食らえだ!」

「あーもう、頭痛い…。あつ、転がつて來たわよ。

…ゲツ、なんか撒き散らしてるし。」

私は宝纏を相手にしながら、相変わらず残念な頭のコイツと軽く言葉を交わす。

「こんの糞モンスターがああああ!

文字通り汚物撒き散らしてんじやねえええええええ!」

「アンタも充分クソハンターよツ!」

そもそも無属性片手剣つてのがニッチすぎるじやない!なんで水片手剣とか毒片手

剣で来ないのよ!?

「フハハハハツ!」

んなもんとっくに売つぱらつたわ！

アカム武器を愛する俺にとつてアカム武器以外はゴミ同然！ 天眼片手も紫毒姫片手も当の昔にオサラバよ！

「ああ……もうダメだコイツ……。」

「オラア！ そこの宝石箱！』

そのピツカピ力の顎をぶち壊してやらあああああ！

「ちよつ……!? なんで硬い顎を狙うのよ!?』

そう言つてあのアホは宝纏に突貫。

けれども宝纏はその体から睡眠性のガスを吹き出した。

「えつ……？ あ、あふつ……。」

や、ヤバイ…。たすけてウルエもくん！」

「うつさいわよ！ 勝手に突つ込んで自業自得でしょ！?

そこで地面とキスしてなさい！」

あんまりに呆れてきたので、私はアホを放つておくことにした。

「な、なんてこと…!?」

そうやつてアタシが寝た隙に襲うつもりなんでしょ！工口同人みたいに！  
たつ、助けてえ！既成事実作られるう！

あつ…、意識が…。」

けれどアホはそんなことを口走る。

もう私はブチギレた。

この際クエストは失敗してもいい。

宝纏にこやし玉を当てまくり、無理やりエリア移動させる。

宝纏がいなくなつたのを確認してから、私は大タル爆弾を抱えて寝ているアホの場所  
へ。

そして呑気に鼻提灯を出しているアホの傍で、盛大な寝起きドツキリをかました。

「アアンツ！ ウルスさんつたら激ししゆぎい！」

く、悔しい……。でも感じちゃう……！

ウルスさんになら……アタシ、体を預けても…

つてそんな展開になるわけねえだろボケがつ！  
なに睡眠爆破を味方にかましとるんじや！」

「うるさいわよッ！ いちいち耳に障るようなこと言つといてエライ口を叩くなッ！」

醜い言い合いが始まった。

アホの口からはやれアカム武器をバカにするなだの、諦めたらそこでクエスト終了ですよ？だとアホらしい言葉が。

私の口からはアホのせいで今回のクエストが長引いてもう失敗確定だと悪口が。

そんな言い合いをしていると、クエスト残り時間はいつのまにか残り5分に。

「……ふう、なんだか不毛だわ……。もうやめにしましよう。  
ああ……イライラする。」

「ああ…、変なところで気があるな…。

このイライラを何かモンスターにぶつけたらいいんだけどな…。」

そんな事を口走った途端。

背後からゴアーガキンガキン、と特徴的な音が。

私達は瞬時にそちらを向いて叫ぶ。

「「こんのクソモンスターがツ！みんなテメエのせいだツ！ぶつ潰してやる!!」」

私達はノコノコ戻ってきた宝纏に向かつて駆け出した。

「フツ、まあこの鈍器ーコングにかかるれば二つ名主任なんざ敵じゃないってこつた。」「アンタ今回全然活躍しないでしようが。

天眼片手の私が7割以上ダメージ稼いだと思うわよ？」

私達は残り時間30秒という状況で見事に宝纏狩獵を達成した。

ああ…、このアホと一緒に疲れる…。

なんで龍識船の集会酒場のマスターは私とコイツを組ませたんだろう…。

?????????????????

「あら。今日は流石に厳しいんじやないかと思つてたんだけど…。」

「こんな状況でも貴方達ならあつきりクリアしちゃうのね。」

「フツフツフ…。まあこの鈍器－コングにかかるば朝飯前ですね…。」

「アンタ今回活躍してないでしようが…。罰として高級お食事券で奢りね。」

「うげつ…。まあしゃあない…。んじやあ先に行つてるぞー…。」

そう言つてカルムは食事テーブルの方へ向かつて行つた。

「……マスター。なんで私とあんなアホが一緒に組むことになつたんですか？」

「あら。そんな事を聞いてくるなんて珍しいわね。  
…………まあ秘密にしておくわ。」

「…………あんまりじやないですかね。」

「ほら、『霸王』の彼も待つているわよ。

クエストクリア後のお食事デートでもしてきなさいな。」

「…………んなツ!? ア、アイツとそんなわけ…」

私の言葉も聞かずにマスターは歩いて行ってしまった。

……腑に落ちないなあ。

まあいいや。お腹空いた。今日はキングターキーでも食べようかな。

私はアホが座っているテーブルへと歩き出した。

「『霸王』と『雪姫』…。

まるで対となる『黒き神』と『白き神』の様じやない…。  
実際、貴方達お似合いよ？ウフフ…。」

酒場のマスターは遠目に2人のハンターを見て微笑んでいた。

### 第3話 達人ビールと薄幸美人

「ウルスさん。私、彼氏が欲しいです。」

「いや、急に何を言いだすのよ。」

大空を駆けるハンターたちの拠点『龍識船』の中にある酒場『ホーンズ』で、私は友人のハンターに呼ばれてお話をしにきた。

だけど、いきなりなんなんだ。彼氏が欲しいとか私に言われても困る。

「だつて…だつてさあ！なんで私は独り身なんだ!?」

正直スタイルや顔立ちはいいだろう！？なんで男が寄り付かない！？」

目の前にいる銀髪の彼女は涙を流しながらそんなことをのたまう。彼女がお酒に強いことはよく知っているから、達人ビールで酔っ払ってはいないんだろうけれど既に呑

んだくれの様な言葉遣いになつてゐる。

「いや、なんで相手が見つからないつて言われてもね‥。」

涙をちよちよぎらせ、鼻水だつて流れ始めている残念な顔の彼女を見る。整つた顔立ちが台無しだ。

綺麗な銀髪のロングヘア、スタイルは抜群。出る所はボンツと出て、締まる所はキユツと締まつている。野郎どもが好みそうなスタイルはしている。

けれど、男どもが寄り付かない。まあきつとその理由はこの一言に尽きるだろう。

「アンタ強すぎるのよ‥。いくら容姿端麗でも二つ名や獰猛化モンスター出現の報告を聞いたら、嬉々として突撃していく様な女性に寄つてくる男はいないと思うわ‥。」「んがあああああ！何でだ!?ハンターなら強敵に挑めることはこの上ない喜びだろう!?!」

「だからって限度があるわ。聞いたわよ？」

アンタこの間、二つ名デイノバルドを防具無しで討伐したみたいじやない‥。正直ド

ン引きレベルだわ…。あの酒場のマスターですらちょっと引きつった笑いを浮かべてたわよ?』

とまあこの彼女は見た目は問題ないのだが、その性格に問題がある。

早い話、戦闘狂なんだ。

いくら美人だからって強敵相手に尻尾振つて突つ込んでいく様な女性だと、彼氏の方の身がもたない。

彼女、ハンターの彼氏がいい!とかほざいているし…。

「うつ…。でも!わたしはもう25なんだ!

四捨五入したら30!元のパーティのみんなはピチピチの10代20代なのに私だけオバサンになっていくのは嫌なんだ!

知り合いハンターから届き続ける、『私達、幸せになります。』のお手紙!結婚式への招待状! そしてそれを眺め、1人枕を濡らす私…。

結婚だなんて言わない!せめて彼氏くらいは作つておきたい!』

うん、必死すぎる…。

でもこの彼女は見た目はいいほうだから、30直前でも大人のお姉さんって感じで通用すると思うけれど…。

なんかズレているよなあ。あの赤い髪の子はよくこの彼女をまとめていたと思う。

「怒り喰らうイビルジョーをソロで狩れる様な人なら理想なんだが…。

ウルスはそんな人を知らないか?」

ほら見ろ、ハードルが高すぎる…。

……ん? でもそれならウチのアホがちようどいいんじやないか?

「ああ、ウチのアカム武器狂いはちようどいいんじやない? アイツを引き取ってくれるなら私としても好都合だわ。」

彼女にそう持ちかけてみる。

けれど…

「ん? だつてアカムの彼はウルスの彼氏じゃないか。」

そんなことを言われて、私は達人ビールを噴き出した。  
な、何を言いだすんだ…。

「いやだつて…。ウルスは私に会う度に彼の話ばっかりじやないか。  
アカム武器を使つてあんな強敵を倒していただの、何だかんだで頼りになるだの、惚  
氣話を聞かされるこつちの身にもなつてくれ…。」

の、惚氣話…!?

嘘だ。私がアイツのことをそんな風に言うはずがない。

「やめてよもう…。そんなこと言つてないつて…。」

「まあ、どうでもいいか…。」

でも私は彼にいい印象を持たれてないんじやないか？

私つたら以前、『アカム武器とかｗｗｗ』と彼に言つてしまつたじやないか。

いや、普通に強い武器もあるというのにあんなことを言つてしまつとは早計だつたな

…。」

ああ、そうだ。彼女とあのアホは仲があんまりよろしくないんだった。

アホはこのことを根に持つてはいないようだから簡単に仲直りは出来そうだけど…。

「そういえば、その彼はどこにいるんだい？」

「この機会に仲直りを…なんて思つていたんだが…。」

「アイツは遺群嶺にジンオウガの狩猟に行つてるわ。」

『覇爆砲で蜂の巣にしてやるぜ！』なんて叫びながら一人で突撃。私が行けるまで待つていればいいのに…。怪我とかしてないかしら？』

私がそう言うと、彼女はクスリと笑つた。

「ほれみろ、やつぱり彼のことが気になつてるんじゃないかな。  
やつぱりウルスと彼はなかなかお似合いだと思うぞ？」

うつ…。この間、マスターにもそう言われた。

た、確かによく思い返してみるとここ最近はアイツのことをよく考えている気がする

…。

「まあ彼氏云々については自分でどうにかするよ。

私だつて『英雄』パーティの一員なんだ！それくらい乗り越えてみせる！  
いざとなつたらパーティメンバーに恋愛事情に詳しそうなヤツもいるしな…。  
あの黒髪娘はお淑やかな女性の皮を被つたムツツリスケベだし…。」

「こらこら、パーティの人をそんな風に言うんじゃないよ。

というかこんなポンコツ女が副リーダーで『英雄』なんて呼ばれて大丈夫なのかな…？

?

「……まあ頑張れば素敵な出会いもいつかは来るでしょ。

私、あのアホからアイテムボックスの整理を頼まれてるからそろそろいくわね。」

「おつ？そんなことを頼まれてるとは…将来はいい奥さん間違いなしだな！」

「…………うるさいってば。貴女はこれからどうするのよ？」

とりあえずこの流れを無理矢理に断ち切ることにする。

「私が…？まあ次はベルナ村に滞在する予定かな…。

メンバーから連絡があつてな。久しぶりに全員で揃うことができるらしい。それに紹介したい人もいるだとか…。

まさか私にいい人を連れてきてくれたなんてことがあつたり……？ともかく期待が持てそうなんだ。」

ううん…。何故だろう…？修羅場の予感がするのは私だけなのか…？

「そう、それじやあルファールも頑張つてね。

じやあ私は行くことにするから。」

「ああ、今日はありがとうな。またいつか。」

そう言つて私は席を立つた。

ううん…、アイツと私がお似合いだつていうのが気にくわない…。

こちどらアイツと一緒にいるのは疲れるから願い下げだというのにな…。

そんな考え方をしながら歩いていたせいなのか、私は影から出てきた人に軽くぶつかつてしまつた。

「あつ…すみません。ちよつと考え方を……」

「んん？ ウルスじやんか。ジンオウガ終わらせてきたぞー。

やつぱり霸爆砲はガチで強いな！ 雷ワソコをキヤインキヤイン言わせてやつたぜ！」

……そこにはアホがいた。

「……なんか浮かない顔してんなあ？

あれか？ 恋する乙女はどうたらこうたらつてヤツか？

ふつふくん、だつたら俺が相談相手になつてやろう！ そんじやあ酒場で達人ビール  
でも一杯…」

：ああ、疲れる。

とりあえずなんかイラつときたので、私は右の拳を強く握りしめる。

そしてカルムのアホ面めがけて渾身の右ストレートをかました。

「……え？ ウルスさん何を… ボヘアツ…」

カルムは一発でダウン。

うん、いいストレートだつた。

今の私だと、アオアシラくらいなら素手で勝てそう。  
ピクピクしているアホを見ながら私は言葉を落とした。

「……本当にアンタと組んでるのは疲れるわ。

まあ…たまには楽しいな、なんて思うことだつてあるんだから、しうがなく組んで

あげてるのよ？

だからあんまり私を困らせないようにしなさいね？」

ふう…なんかスッキリした。

……今のがコイツに抱いている気持ちがどんなものなのかは自分でもわからない。  
好意とも思えるけど、それともまた違う何かのようにも思える。  
まあ、わからないことを考えたつてしまふがいいか。

とりあえずコイツと組んでクエストをこなしていればそれなりに満足なんだ。そ  
れで充分。

そんなことを考えながら、私はその場を後にした。

## 第4話　覇爆砲で　“じやがめよ。　”

我輩はジンオウガである。

『無双の狩人』との呼び名に恥じぬような強さを身につけるために、世界を旅している次第だ。

今まで旅をしてきて、様々なモンスター・ハンターに出会った。そして、幾多の強敵にも遭遇した。

それらを全て撃ち倒し、今の我輩がある。

最近では、ハンター達が我輩のことを『じーきゅうたい』だの何だの言っているが知つたことではない。

まだ我輩は強さを極めてはいないのだ。まだまだ強くなれる素質が自分にあると我輩は思つている。

そして今日。

また目の前にハンターが現れた。

今までハントーは幾度となく相手をして、退けてきた。  
だが、今回の相手は今までとは一線を画しているようだ。

身に纏っている黒い装備からはまるで霸王の如き威圧感が放たれ、我輩の身体を緊張させる。

「て、てめえ…。ちよこまかと逃げ回りやがって…。遺群嶺は一方通行の飛び降り移動箇所が多いんだよ…。何度も行き来させるんじゃねえ！おかげで時間ギリギリじやねえか！」

何か言つているがそんなことは関係ない。

これは全力で挑まなければ、討たれるのはこちらだ。

我輩はそのハンターに向かつて吼える。

「さあて覚悟しやがれ…！　霸爆砲の圧倒的破壊力を見せてやるよ！　通常弾の弾幕でキヤインキヤイン言わせてやるから覚悟しなあ！」

そして闘いが始まつた。

黒い装備を纏つたハンターはその手に持つた武器で、我輩の頭部目掛けて弾丸を撃ち出してきた。

弾丸が直撃し、ハンターは不敵な笑みを浮かべる。

だが、肝心の弾丸はとてもじやないが我輩に通用するものではなかつた。

こんな貧弱な弾丸で我輩を倒そうというのか。

実に愚かだ。今すぐ叩き潰して……何ツ!?

先程貧弱な弾丸が直撃した場所で、何かが炸裂した。

なるほど……先程の弾丸はこれが狙いか……!

ハンターは同じ物と思われる弾丸を再び撃ち出してきた。

この炸裂弾を弱点である頭にもらうのはなかなかに痛手だ。

我輩は後ろへ飛び、尻尾でその弾丸を受け止める。尻尾なら防御力も高く、この程度の炸裂なら充分耐えられる。

ハンターを見ると、次の攻撃の準備をしているようだ。

すかさず突進でハンターに突っ込む。

しかし、ハンターはうまく我輩の突進をいなしたようだ。

やはりこのハンターは手練れだ：。我輩がここで散り果てる可能性だつて充分にある。

こうなつたら我輩も全力を出しきるしかない。

我輩がフルパワーを出すためには膨大な電力がいる。そのため、周りにいる雷光虫を背部へ集めて電力を溜めないといけない。

我輩はすぐに背中に雷光虫を集め始める。

「おっしゃ、隙あり！ これでブレイヴ状態突入だオラア！」

雷光虫を集めている間にも、ハンターは我輩に向かつて弾丸を撃ち続ける。  
ぐつ：。攻撃に怯んでチャージが途中で途切れてしまつた：。

そして、ハンターの身体から青白いオーラが溢れ出た。

まざいな…。 我輩の本能が危険を訴えている。

「さあて、準備は整つた…。

弱点特効に超会心、おまけに見切り十�、さらに通常弾強化…。

さらにさらに、今回は慣れ撃ちに射撃術の特盛フルコースだ！

今からバ火力ボルテージショットを顔面にしこたまぶち込んでやるから覚悟しやがれえ！」

ハンターはそう叫ぶとその場にしゃがみ、我輩を狙つて凄まじい勢いで弾丸を撃ち始めた。

うぐつ…ぐあああっ！？

まざい…！？ なんて威力だ！？

このままだと何も出来ずに倒される…！

我輩は痛みを訴える身体に鞭を打ち、無理矢理雷光虫を集め始める。

「アーツハツハツハ…！そんな隙を見せて無事でいられるとも思つてはいるのかこの大ツコロがよお！

このまま撃ち続けて……ちょつ、ガプラス邪魔つ……ぶふえ、毒つた：。」

近くで飛んでいた小型の飛竜がハンターを小突いているようだが、そんなのはどこ吹く風。

ハンターは遠慮なく我輩に向かつて弾丸を撃ち続ける。

……来た！

全身に電力が駆け巡り、我輩の力が十全と発揮される準備が整つた。  
すぐさまハンターの元へ近づき、前脚を全力で振り下ろす。

だが、その攻撃はハンターに軽くいなされた。

さらに、ハンターは自らが重厚な武器を抱えていることを忘れたかのような速さで我輩から走つて離れる。そして再び弾丸を雨のように撃ち始めた。

ぐうつ……!? まずい：攻撃に怯んで雷光虫がいくらか我輩の制御下から抜けてしまつた……！

そのことが我輩の生存本能を刺激した。

このままでは我輩はここで散る運命だ。

ならば最後に最高の力を出し切つて終わりたい。

そう考えた途端、全身を逆る電気が青みを帯びた。

我輩はその全能感を感じつつ、天に向かつて吼える。

「ハツ、怒り状態か！ 最期に全力出そうってか？ そうゆうの…嫌いじゃないぜ！」

ハンターは遠慮なく我輩に向かつて弾丸を撃つ。

我輩はそれを気にすることなく、ハンターに向かつて全力の突進を仕掛ける。だが、ハンターはその攻撃すら簡単にいなしてしまった。

……ぐつ。

……ダメージのせいなのか、意識でさえ朦朧としてきている。

恐らくこれが最後の攻撃になるであろう。

我輩は背中に逆る電気を活性化させ、全力で飛び上がつた。

「背面ボディプレスか！ 惜しかつたな！」

そんなもんイナシてしまえばへつちやらなんだよ！

そんじやあここら辺で幕引きとさせてもらあばばばばばばばばばばば

何か聞こえたような気がするがそんなことは気にしない。

我輩は全身全霊の力でハンターを叩き潰した。

……手応えはあつた気がする。

すぐさま起き上がり辺りを確認すると周りには大雷光虫が浮遊しており、ハンターは忽然と消え失せていた。

今までハンターを倒したと思つたら忽然と消え失せていたので、今回もなんとか倒せたということだろう。

……強敵だった。 まず間違いなく、今まで我輩が相手取った中では最強であろう

う。正直勝てたのが驚きだ。

世の中、上には上がるるものだな…。  
だが、我輩はまだまだ強くなる。

今回は生死を彷徨うような死闘だつたので得られるものも大きかつた。これで益々  
我輩は強くなれる。

感謝するぞ、強きハンターよ。

そして、雷狼竜は遺群嶺から立ち去つていった。

更なる強さを求めて……。

このジンオウガが今回の経験を糧にして強さを磨き続け、遠い遠い場所にある地方で

『極み吼えるジンオウガ』

と呼ばれるようになるのはまた別のお話。

## 第5話 無属性双剣（笑）

「ハイハイハイハイハイハイハイハイ、ハイツ！」

「やかましい！斬りつける度にハイハイ言つてんじゃないわよ！」

「ええっ!? みんな言わない!? なんかそっちの方が：アレじやん、アレだつて。」

アレが何なのかは知らないけれど、斬りつける度にハイハイ言うのは双剣使つてる時  
だとうるさすぎる。もつと静かにできないのだろうか。

「よっしゃ。 オラオラオラオラオラオラオラ、オラア！」

「このアホは…もう…。」

コイツとクエストに出ると、私はいつも頭を抱えてる気がする。  
アレなの？ コイ  
ツの頭はもうどうにもならないの？

「おつ！ダウングエットオ！　おい、ウルス！チャンスなのに何ボサツとしてるんだ！」

そんなことを考えてたら、あのアホがガムートからダウンを奪つたみたい。　むむ  
⋮、案外やるじやない⋮。

「はいはい⋮。今行くわよ⋮。」

私はダウンをしてもがいているガムートへ向かつて駆け出した。

早い所ガムートを終わらせて、ベリオロスの狩猟にも向かわないとね。

「それにしても⋮無属性双剣ってどうなのよ⋮。」

ガムートを倒し終わつた私は、カルムにそう尋ねる。

今回コイツが担いでいるのは『覇尖爪イクセアムカム』。 双剣というカテゴリーで無属性、切れ味悪いのデメリットはかなりの物だと思うのだけど…。

「ん？ まあ悪くはないんじやないか？ なんか工房のオツチヤンが言つてたけど、『鬼人化してれば斬り方補正がゝ』とかなんとかで切れ味黄色でもなんか弱くないらしいぞ。俺にはよくわからん！」

き、斬り方補正…？ なんだろうそれは…。

武器のプロフェッショナルはやつぱりいろんなことを知つてるなあ…。

「ふうん…。でもさあ、同じ無属性双剣でも鎧裂双剣の方が切れ味もいいし使いやすいんじや…。」

「はい静かに。手数武器使つてる前で鎧裂の名前を出すんじやねえ。頼むから、お願ひだから…。」

あつ…。なんか泣きそうだ…。やつぱりアカム武器の特徴がマツチしない武器種つてあるよね。

「うわあああああん！俺だつてどうにかしてコイツを強くさせてやりたいよおおおおおお！」

だけどお！ドヤツザキとかいう目の上のたんこぶがどうにもならないんだよおおおおおお！」

おお！」

うわあ…なんか泣き出したわ…。めんどくさいなあ…。

「大体なんでアカム片手剣は開発されたのにアカムハンマーは出てこないんだ！武器工房なんとかしろやあ！」

あ、確かにアカムハンマーとか出たら案外使えそうだ。

大剣が結構強いんだから、ハンマーもなかなかの強さになりそう…。いや、それでも何とも言えないような…。

「……まあ、モンスターを倒せないってわけじやないからいいんじやない？ 別に1番優れた武器で來い、つて強制してるわけじやないんだしさ。」

「……どうしたよ。 今日はなんだか尖つてないな？」

カルムが訝しげに聞き返してきた。 「……何よ、いつもの私は尖つているというのだろうか？」

「いや、アンタはよくアカム武器を使い続けるなあつて思つてさ…。 私、ウカム武器が好きで一時期使つてたんだけどさ。 あまりの扱い難さに放り投げちゃつたんだよね。」

私の脳裏に苦い思い出が蘇る。 以前は私だつてコイツと同じようにお気に入りの武器を使つていた。 だつてその武器が好きだつたから。

白き神の力を宿すという武器。 その肩書きに心を惹かれて使つていた時期もあつた。

けれど、そんな武器を使つているハンターは少ない。 あの頃は私だけだつたのかもしない。

「なんでそんなナマクラ武器使つてるんだ、って言われちゃった。 その言葉を言われてから、もうなんか嫌になつてウカム武器は放り投げちやつたわ。 今ではボツクスの奥で眠つてる。

だから、アンタは凄いなあつて思つただけよ。」

「ほん。 お前にもそんな時期があつたんだなあ。 なんかいつつも王道の武器使つてるイメージあつたけど…。」

まあそうでしようね。 普段からコイツのアカム武器に文句を垂れてるハンターが、似たような武器を使つてたとは思わないでしよう。

「でも……、勿体ねえなあ…。」

……勿体ない？

「……どういう意味よ？」

「いや、お前つて相当強いハンターじゃんか。」

そんなハンターが愛用してる武器が一癖も二癖もあるウカム武器！とかだつたらなんか口マン溢れてないか？

こう…、そんな武器を使いこなせるのか！つて目で見られて尊敬されると思わない？」

「それに、俺だつてただアカム武器を使つてるわけじやない。アカム武器を使つて、活躍してこそ意味があると思つてる。 それこそ、この武器をバカにした奴らを見返せるよううにさ。

そんな思いで頑張つてたら、いつのまにか『霸王』なんて称号持ちさ。」

「だから、お前が好きな武器を手放したのは勿体ないなあ…つて思つた。 ただそれだけ。」

……このアホからこんな言葉をかけられるなんて思つてなかつた。

脳裏に好きだつた武器達が思い浮かぶ。私のお気に入りで、手入れも丁寧にしてた。いつかこの武器で高みに辿り着けると思つてた頃を思い出した。

「…………俺みたいなへっぽこハンターがアカム武器を使つて頑張れってんだ。 今ならお前がどんな武器使つたつてバカにされやしないさ。」

……ああもう、自分でもよくわからない気持ちになつてしまつた。

「…………とりあえず、アドバイスとして受け取つておくわ。」

そう返すと、カルムはいつものアホっぽい顔で笑つた。

「おう！ハンターやるなら楽しんでナンボだろ！

ほれ、ベリオロス來たぞ！ パパッと狩つて打ち上げだ！」

「ちょつ、先走るな！」

ベリオロスに向かつて突つ込んでいくアホの後を追つて私は駆け出した。

……ウカム武器か。 久々にアイツらを使つてみるのもいいかも知れないかな？  
カルムの後を追いながら、私はそんなことを思つた。

?????????????????????

「G級個体の紅兜アオアシラ…。これはあの2人位しか頼めないわね。」

腕の立つハンターが集まる、空飛ぶ集会酒場『ホーンズ』。

そこのマスターである女性が、流れてきたクエストの処理に追われていた。

「あら、噂をすれば…。丁度いいわ。」

そう呟くと、酒場の隅の一角に設置されたテーブルに近づいていった。  
そして、そこに座っているウカムルXシリーズを身に纏った女性に話しかける。

「『雪姫』さん、ご機嫌いかがかしら？」

「はいはい…。どうせ、獣獣化モンスターか二つ名なんですよね？」

「あのアホ呼んできますよ…。」

「それなら話が早いわ。よろしく…。」

「あら？ 隨分と珍しい武器を担いでるじゃない。」

酒場のマスターは、彼女が持っている武器をみて少し驚いた。

その白く巨大な武器は大剣というにはあまりに異質な形状。  
切るというよりは、「叩く」「潰す」「削り取る」ことに適したような形をしていた。

「ああ、これですか？ 久し振りに使つてみようかなつて…。」

「私、この武器好きなんですよ。」

「フフツ、素敵な武器じゃない。 それなら今回も簡単にクリアできそうね。」

そう言葉を送ると、彼女は笑つた。

そして、いつもの相棒を呼びに歩いていった。

「あの様子なら、今回も大丈夫ね。

本当に頼もしい2人だわ‥。」

どこか晴れやかな笑顔を見せていた彼女の背中を見ながら、酒場のマスターは言葉を落とした。

## 第6話 下克上に下克上

「えつ…？いい人が見つかった…？」

「ああ！ついに私の人生にも春が来たぞ！このまま寂しくハンター生活を一人で歩んでいくのかと思っていたけれど神は私を見捨てていなかつた！」

龍識船の酒場で少し興奮気味にまくし立てる、知り合いである女性ハンター。『英雄』と呼ばれるパーティの一員で、副リーダーさえ勤めているその女性の口から衝撃的な言葉が飛び出した。

「いや…、ええ…？ どんな人なのよ？」

正直、目の前にいるハンター・ルファールにいいお相手が見つかるとは思えなかつた。

半年ほど前に、ベルナ村にある彼女のマイハウスにお邪魔した時にはあまりの酷さに頭を抱えた。その時には一応片付けてあげたけど、その後にもまた散らかしてしまつてるんだろう。服とかをそこら辺にほつぼり出して半年くらい放置させてそうだ。

腕っぷしは生半可な男なら敵わず、生活はガサツそのもの。そんな女性にくつつく物好きな男性がいるとは…。どんな人なんだろう。

「ううんとな…。怒り喰らうイビルジョーをソロで倒したと聞いてるな…。あとは料理とかの家事全般ができちゃう！　これは素晴らしいすぎる！　一目見た時にこの人しかいないと思つたさ！」

コ、コイツ…。その人に自分が出来ないことを任せつもりだ…。女としてそれはどうなのだろうか？

ルファールの家事は悲惨の一言に尽きる。キノコのパスタを作り、それをカルムが食べたら痺れてぶつ倒れたのは記憶に新しい。

……というか怒り喰らうイビルジョーをソロで？　とんでもないハンターじゃないか…。

私やカルムだつて出来なくは無いだろうけど、そんなハンターはそうそういるもん

じや無い。

目の前にいるルファールやそのパーティのメンバー……。いや、その中でも経験豊富な赤髪の子や黒髪の子ぐらいだろう。

「ど、とんでもない人がいたもんだわね……。

……というかさ、そんな優良物件を他の人が黙つて見ていたの？  
たしか貴女のパーティのリーダーさんとかも、まだ若いとはいえ独り身よね？」

そうルファールに尋ねると彼女はピタッと身体を硬直させた。

……これは何があるな。

「え……えつとだな……。

実は……その……レイリスとかクルルナとかとはもう出来てたんですよね……アハハ……。

「……は？　えつ？　じゃあ……どうゆうことなのよ？」

「…………だから…………その。　　彼女達の仲間に入れてもらいました……。」

……マジか。

「…………なんなのよ、その話。みんなその男に騙されてるんじゃない？」  
「あついや、それはないと思う。むしろ彼が騙されているというか：。」

「…………んん？ 男の方が騙されてる？」

「いや……3人で彼の事を襲つたからさ……エヘヘ……。」

「…………とんでもない悪男に誑かされてるのかと思つたらそんなことはなかつた。むしろその人は被害者だつた。

女性3人に襲われると書けば野郎にとつては夢のようなのかもしれないけれどそれは相手が可憐な女性の場合。今回は見た目は可憐だけれど、その中身は豪傑とも言える女性ハンター3人。まるでイビルジョーのような女性3人に襲われるなんて悪夢以外の何物でもないだろう。

あれか、これが最近話題のイビル嬢か。

「…………もう深くは聞かない。とりあえずその彼が無事な事を祈るわ……。」

「あつ。それについては大丈夫。彼がヤバくなつたら秘薬とかをぶち込んで無理やり起こしてやるからな！」

…………秘薬をそんなことに使うな。それは精神的に大丈夫じやないって。

…………

「…………ゲツ。なんで行き遅れ女がいるんだよ…。」

そんなしようもない話をしていると後ろからいつもの声が。

そちらの方を向くと、案の定アカム武器を担いだカルムがいた。今日は太刀なのか。

「おい！行き遅れとはなんだ！私にはもういい人が見つかっただんだ！二度とそんなことは言わないでもらいたいね！」

「んな!? お前に男だと!?

い、いや! そんなはずはねえ! どうせ迷子になつて そうな男の鳩尾に 1発ぶち込んで無理矢理に迫つたとかそんな感じなんだろ! 僕わかるからな!」

……このアホの頭でも大方正解なのが恐ろしい。

つまりルファールにはそれくらいしかいい人を見つける手段がないということに：いや、今は関係ない話か。

「はいはい、喧嘩はそこまで。 私達、これからライゼクスの狩猟があるから。」

「おつ! ライゼクスか! ついていつてもいいか? ちょいとブレイヴ太刀でスパンとカウンターをしたい気分でな!」

まあ、こうなるだろとは予想してた。 彼女は本当に戦闘狂だからなあ…。

「残念でしたあ〜!! 今回のブレイヴ太刀は俺一人十分だ! 二つ名カエル刀の出る幕なんざ無い……痛つたあ!」

ギヤーギヤーうるさいカルムの頭に拳骨を落とす私。

「うるさいわね……。2人より3人が楽に決まってるでしょうが。

それじゃアルファールも一緒にいくことにするわね。」

「やつぱりウルスは話がわかるなあ！下克上の力を見せてやるぞ！」

というわけでライゼクスの狩猟へこの3人で行くことになりましたとさ。

「カルム刀になんざ絶対負けないからな……！」

カルムは未だにブツブツ言っている。うるさいわね……。

?????????????????????

遺跡平原のエリア7。

高低差の激しい断崖地帯となつてゐる場所で、私たちはライゼクスと戦つていた。

「「アーツハツハツハ！これがブレイヴ太刀の力だあツ！」」

……カルムのアホもうるさいけれど、ルファールもこれまたうるさいなあ。ブレイヴ太刀の何が彼らをあそこまでハイテンションにさせるのだろう。いや、確かにカウンターが楽しいのはわかるつちやわかるけど……。

「おっしゃあ！ ダウン！ 見たか力エル刀め！ これがアカム太刀の底力じやあ！」

「うるさい！ さつき尻尾をぶつた切つたのは下克上だろう！」

ライゼクスの攻撃をバンバン捌きながらも軽い口喧嘩をする2人。 ちょっとやかもしいけれど見てて楽しいかもしれない。

ライゼクスは尻尾を地面に突き刺して放電をする構え。 そこへ太刀の2人は素早く駆け寄った。

「鏡花の構えええ！」

そして2人同時に狩技を発動。 辺りに綺麗な衝撃波の様なものが舞い散った。ライゼクスはたまらず墜落。 2人は更に連撃を加える。

「おーいウルスー。 ぼーっとしてないで早い所終わらせようぜー。」

カルムにそう言われて、初めて自分がぼーっとしていたことに気づく。いや、アンタ達が強すぎるからじやないの？。

……まあ私も一発くらいぶち込んでやらないとね。

私はダウンしているライゼクスの頭部へと駆け寄る。  
そしてブレイヴ大剣特有の抜刀強溜めの構えを取る。  
異質な形をした大剣。

その大剣を全力で振り下ろす。

「もう一丁……！」

そこから全身で大剣を捻るように引っ張りあげる。  
そして、大剣を横薙ぎに渾身の力で振り抜いた。

?????????????????????

「ふうっ！　いい狩りだつた！　まあ…今日は引き分けとしておいてやるか。見せ場を作つたのは同じくらいだつたしな。」

「ちよいと納得できないけど、まあ今回はそうしておいてやるよ…。　次は絶対にギヤ  
フンと言わせてやるからな！」

無事にライゼクスの狩猟を終えた私達は、龍識船の酒場で一杯あげていた。ルファールとカルムも機嫌がいいようで険悪なムードにもなつてない。普段からずっととこうなら、面倒じやないからいいんだけれど……。

「さてと……。それじゃあ私はベルナ村へ戻ることにするよ。他のみんなもそろそろクエストを終わらせて帰つてきてる頃だろうしな。」

「ん？ 帰るのか。 それじゃあ俺もちよいと工房のオヤジさんのところに行つてくるよ。アカム武器運用の研究は日々続いてるんだぜ？」

「ほほう？ 言うじやないか。 それじゃあ次に会う時を楽しみにしているよ。」

ルファールのその言葉を聞くとカルムはニヤリと笑い、そして工房の方へと歩いていった。

「さて……。それじゃあ飛行船が出るから私も行くよ。是非今度はベルナ村に来てほしい。 ウルス達にも彼にあつてほしいからな。」

「ええ、気が向いたら行くことにするわ。 楽しみにしてる。」

私がそう言葉をかけるとルフアールは笑い、そのまま飛行船の発着場へと歩いていつた。

だけど、途中でなにかを思い出したような顔で帰ってきた。どうしたんだろう？  
ルフアールは私の傍へ来ると、耳元で囁いた。

「早い所、ウルスも自分の気持ちを伝えないとだな！　がんばれよ！」

「…………ンなツ!?」

「ハツハツハ！　それじゃあまたな！」

ルフアールはそう言い、笑いながら去つていった。

…………よくも最後に1発ぶち込んでくれたな？ベルナ村に行つた時は覚えてなさい  
よ？

「…………自分の気持ちねえ。…………どーなるんだか。」

私の口からは思わず溜息が漏れた。

私がアйツに抱いている気持ちはよくわからない。好きなのか嫌いなのかもよくわかつてない。

でも……一緒にクエストに出ている今の生活は悪くない。

とりあえず今はこのままやつていけたらいいのかな…？

酒場の真ん中で立ち止まつた私は、一人そんなことを思った。

## 第7話 滅龍ビンなめんな。

「ずばんつ！ずばんつずばんつ！」

ダウン中のラギアクルスに向かって、私は両手に握ったスラッシュユアツクス『真名アナトカルナーム』で連撃を加える。 大丈夫、冷静にだ。

「がしゃんつ！ どしゅどしゅつ！どしゅつ！」

もうすぐでラギアクルスはダウンから復帰するだろう。 私はフイニツシユを決めるために属性解放突きの構えを取る。

私はフイニツシユを決め

「しゅつ！　ズゴゴゴゴゴ…………」

「こだッ！　どつかああ

「うるさいわよッ！　いくら狩技ぶつ放してた最中だからって少しは静かにできないの！」

……あん」

…………ちなみにさつきからズバズバズバドシユドシユ言つてるのはもちろん私ではない。何時もの通り、カルムのアホだ。

今回は、あのアホもスラアクを担いで来ている。もちろんアカム武器。

さつきのガシャガシャほざいていたのは狩技『トランスマッシュ』をぶつ放している最中だつたかららしい。

「あのねえ……一人でやる分には何も言わないわ？　けどね？　隣に別のハンターがいる時ぐらいはバカ丸出しの振る舞いはやめた方いいわよ？」

ラギアカルスが瀕死になつて寝床へと逃げていつたので私達も一休み。

落ちた斬れ味を回復させたり怪力の種を齧つたりしながら、私はそんな言葉をカルムに投げかけた。

「いや……俺だつて見境なくあんな振る舞いはしないつて。まあ：お前の前くらいじやないか？ あんな自由にできるのはさ」

……私の前だけ…ね。なんか複雑な気分だ。

「というかさ……なんでお前はまたカマキリ武器なわけ？ ウカムル武器が泣いてんぞ！」

「いや……だつてラギアカルスつて氷属性通らないじやない。相手が氷弱点ならウカムル武器も担ぐけどあんたみたいに無属性武器じやないんだからなんでもかんでもつてわけにはいかないわよ？」

「おいコラ、霸裂斧を無属性と言いやがつたな？ 違います！ アカムスラアクは『滅龍ビン』という至高のビンが搭載されてるんで

すく！

圧倒的攻撃力！飛び抜けた会心率！更に龍属性！

弱いわけがない！』

「そんなに物理火力が高いのなら同じような性能で『強撃ビン』のついた宝縛スラアクトの方がいい気が……」

「だまれい！なーにが『剣鬼形態』じゃー！なーにが『エネルギーチャージ』じゃあ！スラアクト使いなら黙つて『トランスラッシュ』だろうがよお！

スラッシュユアツクスのことスラッシュユソードつて呼んだやつ絶対許さないからな！うううう……誰か滅龍ビンに救いをくれよお……』

…………なんか勝手に愚痴をこぼし始めたかと思つたら今度は急に泣き出したぞ？  
こつちが疲れるから情緒不安定な反応はやめてほしいところなんだけど……。

「いや……大丈夫だ……。今は無理でもいざれ滅龍ビンが輝くときがくる……！」

「こう……無属性武器にしか乗らないスキルと龍属性を両立できたり、なんか龍を封印する力を貰つたり、なんか特殊なゲージが溜まりやすかつたり……ともかくそんな感じになる日は絶対くる！」

俺はその日まで滅龍ビンを愛し続けるからなあ！

おっしゃあ！ やる気出て来た！

よし、ウルス！ 早い所ラギアカルス倒して帰るぞ！

「ちよつ…いきなり走り出すな！」

本当に感情の起伏が激しいヤツだ…。

最近は私もコイツに振り回されるのに慣れてきてはいるけれど、それでも相変わらず疲れる。

ちよつとよくわからない笑顔を浮かべてラギアカルスの寝床へと走り出すカルムを、私は少し呆れた思いで追いかけ始めた。

???????????????????

「……カマキリスラアクつてさ、ちょっとアカム武器っぽい名前してないか?」

無事にラギアクルスを倒した私達。

剥ぎ取りなどを終え、ギルドからのお迎えを待っている時にカルムがそんなことを呟いた。

……言われてみれば似てなくもない。確かに『覇裂斧アナトカルナイン』とか普通にアカム武器っぽい気がする。

「いや……まあ確かにそうだけど。それがどうしたのよ?」

「スラアクはネセト武器に名前似てるから紫ゲージをくれていいいんじやないかな?」

俺

はそう思う。」

……突拍子も無い事をほざき始めたぞ?」

「……仮にそうなつたとしたらみんなアカム武器を担ぎ始めるわよ?  
アンタがそれで満足ならいいんじやない?」

「うつ…。それだと俺はただのテンション異常なハンターになつちまうな…。  
やっぱアカム武器は今までいいや…」

なんかしょぼんとしてしまつた。悪いことしたかなあ…。

「別にアンタが周りと同じ武器を使つてるからつて私は軽蔑したりはしないわよ?アン  
タはアンタなんだしさ。」

むしろそのままアンタらしくいてほしいわ」

「ん? どうゆうこと? そのままってことは…。」

ははくん。さてはウルスさんつたらとうとう俺の華麗な実力に魅せられてメロメロ  
になつちやつたとか?

アツハツハ！

俺もとうとう周りにチヤホヤされるハンターになつた……あいたあ

！？

「…………うつさい！ ほら、ギルドの迎え来たわよ！ 早い所帰る帰る！」

「ちよちよちよ……そんな怒んなつて……。冗談だからさ……。 カリカリしてたら美人が台無しだぞ～？」

この男は……もう……。

私は足早に迎えの飛行船に乗り込んだ。

早い所このアホから距離を置いておきたいところだ。

「お疲れ様です！ あ、あれ？ ウルスさん、大丈夫ですか？ 顔が真っ赤ですけど……」

「いつ……！？ だ、大丈夫！ とりあえず個室で休んでるわね！」

迎えのギルド職員さんからそんな事を言われてしまった。

恥ずかしくて死にそうになる。

私は個室に入り、防具を脱ぎ捨てて身軽になると個室に設置されている寝台に飛び込

んだ。

そして、胸の奥から込み上げてくる恥ずかしさを隠すように布団の中に丸まつた。

夕食の時にアイツにあつたらぶん殴つてやる…。

茹でダコのような真つ赤な顔になりながら、私は心の中でそんな決断をした。

## 第8話 物理がダメなら榴弾ビンでいいじゃない。

地底火山のエリア8。

灼熱の溶岩が流れるそのエリアで、2人の狩人と1匹の竜が戦いを繰り広げていた

?????????????????????

「俺なりのオオオ！ エーリアールスターアイル!!」

う、うざい…。

私は頭上から聞こえてくる声に我慢しながら、地道にグラビモスの脚を斬り続ける。  
今回はアイツも私もチャージアックス。

アイツはいつも通りアカムの武器だけれど、私が使っているのは『角王盾斧ジオブロ

ス』

圧倒的な物理攻撃力を誇り、切れ味もなかなかに鋭い。さらにその物理攻撃力から繰り出される榴弾ピンの威力は凄まじい、という銘品だ。実際、コレを愛用する狩人も多

いみたい。

「おいコラグラビモスウ！　てめえ、さつきはよくもマグマの中に引きこもりやがったな!?　一方的にグラビームぶつ放しやがつて！　お陰で霸壞斧の属性強化状態が切れちまつたじやねえか！」

ノコノコ陸に出てきた今、お前は霸壞斧の榴弾爆発の前に散るしかないのだあ！　オラア！とつと爆発の前にひれ伏せ…あつ、ちょつ…ガスはやめつ…アツツウ!?

」

……何をしているんだろうアイツは。

本当にクエスト途中の口数が多くすぎる。最近のアイツなら、採取ツアード時間切れになるまでずっと喋つてるとかしそうで少し恐ろしい。

「んにやろう！　背中破壊されたお返しつてか!?　俺はもうブチギレたからな!?　オオオオレナアアリノオオオンヌウウエリウアルストウアアイル!!」

……せめてちゃんとした言葉を喋つてほしい。何と言っているのだろう…ヌルヌ

ルスタイル？ 本当に訳がわからない。

「ナーツハツハツハ！ 見ろ！ この爆発の嵐をオ！」

…というか結構強いのがまた困る。 アイツはひたすらにジャンプ高出力属性解放斬りを繰り出している。

榴弾ビンの爆破エネルギーがグラビモスの背中に蓄積され、 爆発するのだけど…これが強い。 下手したらジオブロスを凌駕する威力の榴弾爆発なんじやないだろうか？ ともかく、 あれほどの威力の榴弾ビンは見たことがなかつた。

そのおかげでグラビモスはほぼ怯みっぱなし。 私もグラビモスの足下でひたすら攻撃を続けることができた。

「おーい、 ウルス！ 腹の部位破壊は終わりそうか!?」

「え？ あ、 ええ！ 今終わるわ！」

いきなり声をかけられたので少しだけ驚いてしまつたが、 すぐに正気に戻る。 さつきも言つたけどグラビモスはかなりの頻度で怯んでいる。 そのおかげで私は

グラビモスの腹部に攻撃を叩き込めた。 結果、腹部は部位破壊寸前。

肉質の柔らかい甲殻の内部が露出し始めた。

「いち、にの……さんつ」

私は壊れかけの腹部の甲殻へ高出力属性解放斬りを放つた。 攻撃は無事腹部にヒット。 遅れて、榴弾ビンの爆発がグラビモスの腹部を襲う。 そして、腹部の甲殻は見事に弾け飛んだ。 よし……破壊完了。

「カルム！ 破壊したわ！」

「ナイツスウ～！ オラア！ クソ肉質野郎！ イクセエムカムの必殺の一撃をその豆腐みてーな腹で食らいやがれやあああ！！」

そう叫びながら、カルムはジャンプしながらの超高出力属性解放斬りをグラビモスの腹部に叩き込んだ。

凄まじい榴弾爆発の嵐がグラビモスの体で巻き起こり、その後グラビモスは動かなくなつた。

ふう…あつさりおわったかな…。

「おっし！ いつちよあがり！ 腹減つた！ 帰る！」

「え…ちよ、待ちなさい！ 置いてくな！」

「？ぎ取りを恐ろしいほど速さで終えたカルムは、よほど腹が減っていたのかすぐさまベースキャンプに走り出した。

「なんだよ、俺は腹が減ってるんだよ…。 奢つてもいいから早くしてくれよお…」

「あら？ 奢つてくれるの？ 言質は頂いたわよ？」

「おう、最近景気がいいからな！ メシの少しくらいかまわねえさ！」

コイツが自分からメシに誘うなんて珍しいなあ…。

まあ悪い気はしないし、ありがたく頃くことにしよう。

そう考え、私達は少し急ぎでベースキャンプへ駆け出した。

?????????????????????

「え、つ……？私に用事ですか？」  
「ええ、そうなの。これから2人でお食事だというのに本当に申し訳ないわ……」

酒場に戻った途端、私は酒場のマスターに捕まってしまった…。  
くそ、少しだけ楽しみにしてたのに…。

「あ…。じゃあ今日は無しだな…。ちつくしよう、覇壊斧の魅力をたっぷり話して  
やろうと思つてたのにな…」

「カルムくんもごめんなさいね…。これだけはどうしても外せなくつて…」

「じゃあ、俺は一人で食うことにするよ。腹が減つてしまふがねえや」

カルムはそう言つて立ち去つていつた。

うん、今回は私も少し残念だなあ…。  
最近忙しくて2人でクエストに出るのも久  
しぶりだというのに…。

「それで…マスター。急用つてなんですか？」

「えつ？…ああ、それなんだけどね…？」

んん？なんか様子がおかしくないか？

?????????????????????

「はい、ギガントミートお待たせしました」  
「おう！ ありがとな！ しかし、受付のおつちやんとこうしてのんびり話せるのも久し

ぶりだな！」

「ええ、そうですね。ですが『霸王』の肩書きを持つ程のカルムさんなら各地に引っ張りだこなのでしようがない話ですよ」

「ううん…。そうやつてチヤホヤされるのはそんなに好きじゃないんだけどなあ…」

目の前に出されたギガントミートを頬張りながら、俺は酒場クエスト受付のおつちゃんとお喋りをする。

「そういえば今日はウルスさんとお食事の予定だったとか…。 残念でしたね」

「まあしようがないさ。 アイツだって一流のハンターなんだ。 急に嫌な依頼が入つたつて何も不思議じやないって」

「おや？ まるで自分も経験したことがあるような言い草ですね」

「ハハッ、どうだかな」

うん、やつぱり受付のおつちゃん…ウエーナーさんは話してて楽しいな。 加工屋の  
おつちゃんに並ぶくらいだ。

「そういえば、なかなかの武器をお持ちですね。アカムトルムのチャージアックスとは、強力な逸品だ…」

「おっ!? この武器の魅力がわかるのか!?」

「ええ、それはもちろん。うまく使いこなせれば相当な業物ということも知っていますよ?」

これは驚いたな…。

おつちゃんがアカム武器の魅力をわかつてくれる人だとは思つてなかつた。

よし…こうなつたらカルムさん、アカム武器の魅力を余すことなく喋つちやうぞ?

こうして、俺と受付のおつちゃんとのアカム武器談義は始まつた…。

「いやあ、カルムさんは本当にアカム武器が好きですね。 覇龍の武器…私も現役なら使つてみたいものです」

「おっちゃんは現役引退しちまつてるのがもつたいないなあ。 おつと…もしかしてあんまり触れられられたくない話だつたか？」

「いえ、昔の話ですので…。」

「そういえばカルムさん。 最近『雪姫』の彼女さんとはどうなんですか？ 相変わらず仲は良いみたいですが…」

「どうなんですって言われてもなあ…」

「おっちゃんから少し難しい質問をされてしまった。 どうなんですってどういうことだよ…。 こつちが聞きたいわ。」

「まあ楽しくやれてるんじゃないかな？ 最近アイツがいきなり慌てだしたりするけどさ。 ともかくアイツが樂しけりや俺はそれで構わないよ」

「ふむ…そうですか…」

な、なんなんだ…？ いつもと様子が違う感じだぞ…？ 普段ならこんな質問はしてこない人だし…。

「こう…お付き合いしたいな～なんて思つたりはしないんですか？」

「ブフツ…ゴツ…ゲハツ…」

そんなことを考えてたらおっちゃんから爆弾を落とされた。 飲み物噴き出しちまつたじやねーか。

「なななな…何を言いはじめるんだよ…」

「いや…お2人がなかなかお似合いだつたもので。 この受付に立つていると、そういつたことにも興味は湧いてくるものなのですよ。 で、どうなんですか？」

お、おっちゃんの押しのがすごい…。 これは逃げられそうにないかもな…。

「アイツねえ…。まあ確かにべっぴんさんだよなあ。アイツとお近づきになりたい！なんて野郎はそこいらじゅうに溢れてるんじゃないかな？」

……まあきっとそん中にいい人がいるだろうよ」

「おや？ カルムさんが雪姫…ウルスさんのことをどう思ってるか聞いたつもりですが

…」

「お、俺？ いやあ…どうつたってなあ…」

「一体今日のおっちゃんは何なんだ…。実は酔つてたりするんじゃないだろうな？」

「いえ、別に酔つてなどいないですよ」

「読心術かよ…。アイツをどう思つてるか、ねえ…」

「俺がウルスのことをどう思つてるか。改めて考えるとなかなか難しいことに気づいた。

ぬぬぬ…これはどう答えるべきだ…？」

「…………まあ、こんな俺とクエストだけでも付き合ってくれて感謝してるかな。普通な

ら俺みたいな奴は願い下げ、つて奴らの方が多いからアイツみたいに存在がそばにいてくれるのはそれだけでありがたいよ」

「ふむふむ…やっぱり美人で綺麗な方がそばにいてくれるのは嬉しいものですね」

「なんかズレてないか…？」

相変わらずどこか様子のおかしいおっちゃんだけど、俺が足りない頭で考え抜いた結果を口に出してみた。まあ…ありのままを答えただけなんだけどさ。

「好きか嫌いかで言えばどちらですか？」  
「な、なんだよその質問…。」

……………アイツの事は…………ま、まあ…す、好きだよ」

「ふむ、ありがとうございます。いいデータが取れましたよ」

「アンタは一体なんのデータを集めてるんだ…。」

……………疲れたから俺もう帰つていいか？」

「おや、結構な時間を奪つてしまつたみたいですね。ほんのお詫びですが、代金を割引して起きますよ」

「おつ、サンキュー！ まあ割引してくれるなら悪い時間じゃなかつたかもな！  
そんじやおつちやん！ またメシ食いに来るからな！」

なんだか少し落ち着かない食事だつたけれど、まあ気分は悪くない。  
メシを食つたから、あとはゆっくり休んで英気を養うことにしてよう。  
そう考へると、多少なりとも疲労の溜まつていた足も軽くなつた。  
俺は軽くなつた足でマイハウスへの帰路を急いだ。

?????????????????????

「…………」

「……マスター、これは流石にあんまりな仕打ちなんでは……？」

「ふつ……ふふつ……あつはつは！ 何よ！ 彼も案外ピュアな心の持ち主じゃない！」

『アイツの事は好きだよ』ですって！ ふふつ……ああ可笑しい！ 貴方達両想いじやない！』

私は真っ赤な顔になりながら、酒場のマスターに散々イジられ、煽られていた。

急用だと聞いて着いてきたらこれだ…。 なんでアイツの本音をクエストカウンターの裏で聞かないといけないのだろうか…。

「これはもう貴女が勇気を出して突撃しちゃいなさいよ！ 彼だつてあんな感じなんだ

からきつと成功するわよ！」

「だーつ！ マスターさんは黙つててください！ これは私の問題なんです！」  
「そういういつまでも進展しないじゃないの…。せつかく助け舟を出してあげたんだ  
からこの機会にアタックしてみたら？」  
「ぬ、ぬぐぐ…」

なんで私がこんな恥ずかしい思いをしないといけないんだ…!?

「き、今日は帰ることにします！ アイツにも変なこと教えないでくださいよ！」

「あつ、ウルスさん少々お待ちを…。 荒れた心を沈めるのにはセレブリティーを飲む  
のが1番です。 お持ち帰り用をご用意させて頂こうと思つたんですがどうしますか  
？」

「いただきます！とつとと帰りたいので出来るだけ速くお願ひします！」

ともかく、こういう時はマイハウスのベッドの中で丸くなるのが一番だ。

「はい、セレブリティーお待ちどうさまです」

「ありがとうございます！ コラア！ マスターさんはいつまでも笑ってるんですか！？」

ちなみに、酒場のマスターは私が酒場から立ち去るまで笑い止むことはなかつたみたい。

本当にやめてほしい。恥ずか死してネコタクのお世話になつてしまいそうだ。

……でも、

95 第8話 物理がダメなら榴弾ピンでいいじゃない。

アイツが直接ではないにしろ、『好き』と言つてくれたのは嬉しかったかな？

# 第9話 はきゅん、ほうきゅん、ずつきゅくん

「……」

連續殴りの隙を狙つて、ラージヤンの頭を射抜く。

構えた弓から放たれた拡散矢は、全弾命中とはいかなかつたものの5本中4本が氷の結晶を撒き散らしながらヒット。

そして、ラージヤンの頭の角が片方だけ碎け散つた。  
うん、なかなかいい感じだ、私は。

今回の依頼は原生林で激昂ラージヤン2頭の狩獵。ギルドとしても想定していなかつたラージヤンの同時出現らしく、私とカルムの2人が急遽クエストに駆り出される事に。

まあ確かに激昂ラージヤンは強敵だ。

だけど、私達が相手ならそこまで難しいクエストではない。いつも通りの調子なら。

……そう、いつも通りの調子なら。

……いつも通りの動きをあのアホがしてるなら。

「アーケツソオー！ ナンテツヨイラージャンナンダー！」

—

……あのアホの動きが随分と良くない。

ラージヤンにアカム弓の時点で物申したいところだけど、100歩譲つてそれはまだ許せる。龍属性が死ぬけど物理火力があるわけだし。実際、既に狩猟した1頭目を相手取った時はいい動きをしていた。

だけど今は溜め1をペチペチと放ち、辺りに悲しい威力の拡散矢をばら撒いている。そもそもラージヤンにヒットしていない。というか私に当たっている。迷惑なことこの上ない。

しかもあのアホ、このクエストで2回も力尽きた。それも2頭目を相手している間だけで。

詰まる所、このクエストはあと1回力尽きた時点でクエスト失敗。とてもじやないがそんなのは勘弁願いたい。

「ねえアンタ！ベースキャンプで待機してろって言つたわよね！？ なんで来てるの！？」

「…………」

アイツにしては珍しく口数が少ない。普段通りの動きでそれなら万々歳なんだけど、今は全然嬉しくない。

2回力尽きた後のプレッシャーは今までと段違い。私一人で戦つた方がまだマシンなのでベースキャンプで待機してろとカルムに言つたのに、何故かノコノコ狩場に現れる。

バカか？バカなのか？ああうん、バカだつたなそういえば。

こうなつたらしようがない。

念のために持ち込んでおいた生命の粉塵をガンガン使いまくつて、アイツを死なせないようにならないといけない。

カルムは向こうでクンチュウ4匹に絡まれてそれに手間取つてゐる。応援は一切期待できない。

味方がいることで逆に足枷となる。随分とおかしな状況だ。

だけどやるしかない。

今回は私も久々にウカム武器。ラージヤン相手ならウカム弓はなかなか最適な武器なはず。だからきつと大丈夫。

たとえ私は一人ぼっちでも、酒場のマスターの期待に応えることができ…

「あいたつ」

「あつ…」

カルムから矢を当てられた。ラージヤンには一切当たらず、私だけに。

そして、ラージヤンは気光ブレスの構え。

えつ、ちよつと待つて…?

空に向かつて吠えた金獅子は口から光のレーザーを放ち、私に向かつてぶつ放した。  
これは……避けられない。

私の体がレーザーに飲み込まれ、全身に激痛が走る。

あつ：つう…。こんな大技をマトモに喰らうのは久しぶり…。最近はうまく立ち回つてたから、久方振りの痛さを味わつた。  
これはあまりいいものじやないかな。

「か…回復しなきや…」

回復の隙を見つけるために、ラージヤンの方を見る。  
だけど、そこにあるはずのラージヤンは消え失せていた。

……え？

エリア内にはまだ緊張感が漂つている。つまり、ラージャンは戦闘状態でいるということ。そして私は狙われているということ。  
……どこから？

「上ツ……！」

すぐさま体を投げ出す。

次の瞬間、私の立っていた場所に向かつてラージャンが回転攻撃を上空からかましてきた。

まだだ。G級個体のラージャンは連続で回転攻撃をする。だけど、その猛攻を乗り越えれば隙を晒してくれるのが嬉しい。

ここを乗り切れば……。

2回目の回転攻撃も回避。よし、いける。

3回目の回転攻撃も同じように……。

そこまで考えたところで……、

目の前に、こちらに向かつて転がつてきているクンチユウが見えた。

「え？ あたつ…」

空気を読まずに転がつてきたクンチユウは、見事に私にヒット。

私は一瞬だけど怯んでしまった。

え、ちょっと待つて？ このままだと…。

?????????????????????

私の意識は途切れた。

そう思つて上を見上げると、体を回転させてこちらに突撃してくるラージヤンが見え  
……

「うにやつ……」

ネコタクから乱暴に振り下ろされ、原生林ベースキャンプの湿つた地面の上にしたたかに体を打ちつける。

「あく……いつたあ…。え？ ちよ、ちよつと待つて…」

私を運んで来たネコタクアイルーが、ベースキャンプに設置されている発煙筒を使つて青い煙を上げた。

……も、もしかして失敗？

「ね、ねえアイルーさん：。もしかして今回はクエスト失敗？」

「うニヤ～…残念だけど今日はそうなるニヤ。惜しいところだつたけど、ボク達もラージャンの攻撃を掻い潜つて救出するのも一苦労なんだニヤ。申し訳ないニヤ～」

ネコタクアイルーさん達はそう言うと、地面に潜つて姿を消した。

あ、あはは…。

……クエスト失敗？ 待つてよ…あと少しだつたのに…。 私はいい動きをしてたのに…。

…………あのアホのせいだ。こうなるなら、ベースキャンプに引っ込んでもらつておいた方がマシだつた。

アイツが戻つてきたら1発ぶん殴つて…

そこまで考えたところで、ベースキャンプに緑色の煙が上がつた。

煙が晴れると、そこにはアホが佇んでいた。

……やつと来たか。

「…………ねえ、どうしてくれんのよ。アンタのせいでクエスト失敗よ。 ねえ！ どうやつて責任どるのよ!?」

ねえ！ どう

「…………」

思わず声を荒げる私だけど、カルムは黙つたまま。ああ…イライラする。

「なんで黙つてるのよ!? なんか言つたらどうなの!?」

「…………」

「…………ねえ、なんで黙るの? これ以上私をイライラさせないでよ!?

「ちょっといい加減にして…………」

そう言いながら、私は黙つたままのカルムに近づき――――――

カルムが私を押し倒した。

「……は？」

カルムの息が荒い。

私の胸の辺りで荒い呼吸を繰り返し、腕で私の肩を押さえつけてくる。

「ちょ…ちょつと……なんの冗談よ…？」

カルムの息が熱い。

荒い呼吸をしながら、私の頬に掌を当ててくる。

私の体はカルムにのしかかられ、身動きができない。

ちよ、ちよつとこれはマズイ場面なんじやないだろうか…?

「ねえ！ふざけてるならいい加減にしないと…」

そこまで言つたところで、カルムが更に私の体を地面に押し付ける。私の片腕と肩はカルムの両腕で押さえつけられ、身動きが取れない。目の前には荒い呼吸をするカルムの顔。熱い息が私の顔を撫でる。

思わず、ドキリとした。

「ね、ねえ…？聞いてる…？　ちよつと…！そういうことするならこんなところじゃないでしょ！？　ねえ！お願ひつてば！　ダメ！今下着ダサいんだって――」  
「…………」

私の願いはカルムには届かなかつたみたい。カルムは熱い息を吐きながら、私の顔に迫る。

思わず目を瞑つた私。  
熱い息が顔を撫でて、私の唇に向かつて――――――

……………ちよつと待つて？

息が熱すぎる。目を閉じて感じることができるのは、熱すぎる息と、荒く…弱々しい

呼吸。

そして、ドサリと重いものが私の体に倒れかかった。

「…………え？」

目を開けると、顔を真っ赤にしたカルムが私の体の上で倒れていた。

「ちょ…ちょつと?! 大丈夫!？」

カルムにそう問い合わせるが、返事は一切なし。念のため、カルムの額に手を触れてみる。

すると、触れた額には相当な熱がこもっていた。

「ちょつ……酷い熱じゃない!? 早く寝かせないと…」

なんとかカルムの下から這い出て、倒れたままのカルムをベースキャンプのベッドに運び、横に寝かせる。

横になつたカルムの額からは、かなりの量の粒汗が現れていた。

「ふう……バカは風邪ひかないってのは嘘だつたのかしら…?」

さて……と、汗拭いてあげた方いいのかな……？」

そう呟きながら、私はベースキャンプに備え付けられている布と手ごろな大きさの容器を手に取つた。

あいにく今回は原生林でのクエスト。ベースキャンプには綺麗で冷たい水が流れている。

「これならまだラクになるわよね……？」

水を汲み、布を浸して絞る。

そして、ヒンヤリとした布でカルムの顔に浮かんでいる汗を拭き取つた。

顔から幾分か熱が引いたような気はする。けれど、カルムの呼吸は依然として荒いままだつた。

「な、なんで……。

…………あつ、防具外してあげた方楽かしら？」

……コイツの防具を外すのか。

いや、別にやましい理由なんて一切ない。

ただ、苦しそうだから汗を拭いてあげる……それだけだ。

そう自分に言い聞かせて、私はカルム自慢のアカム装備を脱がせ始めた。

「な、なかなかいい体してるのね……」

おっと、何言つてるんだ私は……」

装備を外すと、数々のクエストをこなしてきたハンターにふさわしい体が目の前に露わになつた。正直いい体をしてると思う。流石は『霸王』の異名を持つといったところだろうか。

「さて……と、さつさと拭いてあげなくちゃね。……私もちょっと疲れてるんだ、動きやすい格好になつたつて文句ないでしょ」

腕と胴当部分の防具を外して身軽になつた私は、無言でカルムの体に浮き出ている汗を拭く。……なんだろ、誰も見てないはずなのに何か恥ずかしいな……。

一通り拭き終わると、カルムの呼吸も幾分か穏やかになつたような気もする。  
うん、良かつた。

「あとは……活力剤でも飲ませておけばいいかしら？」

というわけで、活力剤をカルムに飲ませることに。

今回は難しいクエストだつたから、いにしえの秘薬の調合素材を持つてきておいたのが幸いした。自然回復力を高める薬だから今回みたいなケースでも有効だろう。

「ほら……飲みなさいよ。少しはマシになるつてば…」

カルムの口に活力剤を流し込む。管のようなものがあれば1番いいんだけど、残念ながらそんなものはなかつた。

「……ゴ、ゴボツ、ガハツ……」  
「あ……ゴ、ごめん……」

……むせてしまつた。顔色も少し悪くなつたみたい。

うくん…ちょっと悪いことしちやつたかな…?

でも…活力剤を飲ませてあげられれば、バツチリだと思うしなあ…。

「寝てる相手にうまく薬を飲ませる方法ねえ…。ハンターノートにでも乗つてるかしら？」

とりあえず困つた時のハンターノートだ。

月刊誌『狩りに生きる』に並んで、ハンター稼業を勤しむ人ならこまめに目を通すべき書物の一つだと思う。

「……もともとギルドの迎えも少し遅くなるつていつてたしね…。薬を飲ませてから私も一休みかな…。さて、薬の飲ませ方…つと…」

パラパラとページをめくり、目的箇所を探す。そして、回復薬を始めとしたいろんな薬が並んでいるページに辿り着いた。

「飲ませ方…………えツ!?」

薬の飲ませ方を見て、思わず声をあげた。  
手に活力剤を持ったまま、寝ているカルムを見て固まってしまった私だつた。

「カルムさん。大丈夫ですか？」  
「ん…………ぐつ…………」

誰かから呼びかけられ、重い体を起こす。

……重い体？いや、そんなに重いわけじゃないな…。

「あ、あれ…？俺寝てた…？」

「そうですよ。ウルスさんがそばにいてくれたみたいですね～。うふふ、仲良しです  
ね～！」

どこかのんびりした口調のギルド職員さんからそう言われる。  
あれ…？クエストはどうなった？

「あ、クエストは残念ながら失敗してしまいました…。ですが一頭は狩猟してくれたので、次の対応もかなり楽になりましたよー！ありがとうございますー！」

あ、ああ…失敗したのか…。

……俺のせいだな。体調悪いのに無理して來たから…。

「とりあえず、今は龍識船に戻りましょう。私は先に行つてるので、ウルスさんを起こしてあげてくださいー」

ギルド職員さんは、のんびりとした口調のまま歩いて行つてしまつた。

「んつ……。あれ？ 体、軽くなつてる？」

体を伸ばした時、一切重さを感じなかつた。

あれだけ体調が悪かつたのが嘘のようだつた。……ウルスが？

「おーい、ウルス。ギルドの迎え來たぞー」

「んん…」

ベッドのそばでウトウトしていたウルスに声をかける。

「あひやつ!? カ、カルム! 起きてたんだ!?」

「…………どたい? そんなに慌てて…」

俺に起こされたウルスはなぜか慌てた様子。

どうしたんだ一体……。

「あく…。すまん。俺のせいでクエスト失敗しちまつた。 本当にスマン。

なんとか埋め合わせはするから、許してほし…」

「あく…! 大丈夫、大丈夫! 全然気にしてないから! ほら! 早く帰りましょう!」

…………なんだか変だなあ。

ふと、ベースキャンプの机の上に置かれている、空になつた活力剤の容器が目に入つた。

「あつ、もしかしてあれ飲ませてくれたのか？助かつたよ！　お陰で体がすつごい楽で……」

「良かつたわね！それじゃ帰りましょ！」

……いや、ホントどうした。

「なあ、ウルス。大丈夫か？顔が真っ赤だけど……」

「全ツ然大丈夫だから！ほら、早く帰るわよ！」

「あ、とうとうわかりました……？」

とりあえず帰ることにしました。

残念ながら今回はクエスト失敗してしまった。次は絶対に成功させてやる。  
目を合わせてくれないウルスの背中を見ながら、そんな決意をした俺だった。

……ウルスの口から活力剤の香りがしたけど、アイツも飲んでたのかな?

# 第10話 はぴーならできる。そう、はぴーならね。

「3ヶ月放置つてどういうことだアアアアア!!」

そう叫びながら、ウラガンキンの顎に向かつて狩猟笛の振り下ろしをブチかます。  
弾かれ無効効果を持つ旋律を自分にかけてるので、ウラガンキンの硬い顎でも弾か  
れることはない。

そして、顎に振り下ろしを喰らったウラガンキンはスタン。横に倒れ込み、もがき始  
めた。

「1話平均3000文字なんだから、サッサと書けやアアアアア!!」

納刀継続からの後方攻撃、さらに納刀継続へと繋げてまた後方攻撃。  
強力なコンボをガンガン頭部に叩き込む。  
連撃を喰らったウラガンキンの顎は、とうとう碎け散り、弱点が露出した。

「あのクソ作 s……」

「おい待てウルス！それ以上はいかん！お前のキヤラがおかしくなる！そーゆーのは俺のポジションなはずだぞ！」

「ハツ……？ わ、私は一体何を口走つて……？」

カルムに呼び止められ、ふと我に帰る。

な、何を叫んでいたのだろう私は…。何かこう…『3ヶ月も放置された鬱憤を晴らしてやる！』的な一心で叫んでいた気がするけど…。よく覚えていない…。

「それ以上攻撃すると、俺のアカム笛の出番がないまま終わる！それだけは作品のテーマぶち壊しだからやめてくれ！」

「え、ええ…わかつたわ…」

「おっしゃ！俺のターン！」

はぴーの圧倒的物理火力を受けてみろや、頬野郎がア！」

カルムが叫びながら、ウラガンキンの顎に連続攻撃を叩き込む。

ビカビカと会心の一撃が発生し、カルムが最後の叩きつけを放つたところでウラガンキンは動かなくなつた。

……うん、終わつてしまつたみたい。

アカム笛のいい所は見せずじまいだつたような氣もするけど……。

「力、カルム？ 大丈夫？？」

「ふぐつ……」

そつと横からカルムを覗き込むと、目には薄つすらと涙が浮かんでいた。

……いや、そんなにか。

いくら出番が少なかつたとはいえ、そこまでか。大の男が泣くほどか。

「3ヶ月ぶりなのに！ 3ヶ月ぶりなのに！」

こんな扱いはあんまりだろ？！

アレか？！アレなのか？！作者はアカム武器が嫌いなのか！？」

「好きな方だけど、使用頻度はそこまででも無いらしいわよ？」

「クソッタレがあああああ！」

カルムが吠える。

あーあー、本当にやかましいやつだ。

1を聞かれて10返す…というよりは、0でも勝手に10喋つてるイメージ。1を聞いた日なんかには100くらい返してくる事だろう。

だけど、私もこういうのには慣れてしまった。

たしかにうるさくて疲れるのは確かだけど、飽きることがない。

以前はソロで活動することが多かつたけれど、パーティを組むとここまで飽きないものなんだなと改めて認識させられた。

ルフアールがパーティを組むことをやたら勧めてきていたのも今ならわかる。

「おいウルス！この後続けてまた別のクエスト行くぞ！」

「ええ…。もう休みたいのだけれど…」

「知るか！アカム笛はアカム武器の中でも数少ないメジャービーロなんだ！」

「それをこんな扱いにされてたまるかあ！」

「はいはい…。わかったわよ……」

ウラガンキンの剥ぎ取りを終え、そんな会話を交わす私達。

別に次のクエストに行くのは構わないのだけれど、都合よくクエストは来てているのだろうか？

「ねえカルム。クエストを続けるのはいいんだけど、いい感じのクエストは来てたわけ？」

「おう！ 確か宝纏ウラガンキン2頭のクエストが…」

「却下」

「なんでじや!?」

当たり前だ。前に片手剣で宝纏に行つた時も地獄を味わった。  
あんなのは2度とゴメンだ。

「当たり前じゃない！」

宝纏に切れ味悪い無属性武器って選択が頭沸いてるわ！？」

「切れ味は関係無いしいー！」

弾かれ無効があるから無理やり攻撃通せますしいー！?

顎が壊れたら弱点になりますしいーー!?」

「そういう問題じやないつて言つてるでしようが！あんたそこまでアホなの!?」「あんたそこまでアホなの!?」とかいう人の方がアホなんですうーー！てめー、攻撃370に会心40、さらに攻撃防御強化小アップ吹けるアカム笛なめんなよ！アカム笛ならできる！そう、アカム笛なら！」

「宝纏の笛だつて攻撃370で攻撃大吹けるの知つてんのよ！」

「ぶああああああ宝纏武器の話はやめろやあああああ！」

ギヤーギヤーと喚く私達。

まあ……飽きないことは確かなのだけれど、ストレスが溜まることだつてある。

その辺りを、このアホにはよくわかつてもらいたいのだけれど……まあ無理な話なんだろう。

結局、喚き合いはギルドの迎えの人達が来るまで続いたらしい。



クエストを終え、龍識船のマイハウスで仮眠をとる私。  
なんだかんだで次のクエストにも行っちゃうだろうし、しつかり体力は回復さ

せておかないといけない。

「はあ……たまにはアカム武器以外も使えばいいのに……。ほんとアホね……」

ブツブツと独り言を垂れ流す私。

頭のなかでは、どのように宝纏のクエストへ臨むか考えていた。

「やつぱり属性はいるわよね……。

毒か水か……。あのアホのことをしつかりサポートできるようになら……」

……今、私はアイツとペアでパーティを組んでいる。

私は真面目な装備で、アイツはアカム武器。

1人はふざけているようだけれど、それくらいが騒がしくてちよどいいのかもしれない。

実際私だつてそんな心地は悪くないわね。

「……ふふつ、本当に飽きないわね。

なんだかんだで、顎を破壊とかしちやうんだろうなあ

そんなことを眩いでいると、玄関からノックが聞こえた。

なんとなく相手は予想できただけど、玄関に向かう。

ドアを開けると、そこにはニンマリと眩しい笑みを浮かべるカルムがいた。  
ううん、少し嫌な予感。

「おいウルス！ いい知らせだ！」

「……何？ 内容次第では殴るけど？」

「おおふ……まあこれはきっといい知らせだ！」

満面の笑みを浮かべたまま喋るカルム。

いい知らせか…。宝纏2頭が宝纏单体クエストになつたとかだつたらうれしいのだけれど…。

なんてことを考えていたら、カルムは言い放つた。

「なんと、宝纏2頭のクエストにグラビモスが現れたらしい！」

お陰で宝纏2頭、グラビモス1頭の3体狩猟になつちまつたぞ！  
こりや腕がなるな！アカム笛の威力をモンスター達に……ウルス？」

右手の拳をグッと握りしめる。

狙いは満面の笑みが浮かんでいる顔面。

このアホには一発ぶち込んでやらないといけないという使命感に駆られた。

「カルム……？」

せめてチャージアックスかガンランスを担いで来なさい？」

「えつ……ちょつ、顔が怖……ぶ」おお……」

満面の笑みを浮かべているカルムに、私も満面の笑み。  
そして、握りしめた拳でカルムの顔面をぶち抜いた。

これで少しは反省してくれれば……いや、無理だろうなあ。  
望み薄の期待をしながら、私はマイハウスのドアを閉めた。

第11話 物理がダメならフルバーストでいいじゃない。

「ククク……！」

……一体今度は何だ。

戦いの最中だというのに急に笑い出した。それもいつものようなクソうるさい大笑いではなく、何か悲願を達成した時の悪者のような感じで。

「クツクツク……！」

猛烈に突っ込みたい衝動に駆られるけど、今は我慢。目の前ではグラビモスがダウン中。ラッシュをかけてこのまま一気に終わらせたいところ。

「クツクツク……！ イヤンクツク……！」

「だあああああー！ なんのよそのクソ寒いギヤグは!? もう黙りなさい！ この後に宝纏2体が控えてるんでしようが!!」

ああうん、ダメだ。もうツツコまではいられなかつた。すぐにアホに向かつて砲撃をぶつ放す。

忌々しいことに、アホはそれをイナした。なんて反射神経してんのよ…。

「フハハハハツ!!俺は今、最高に機嫌がいいのだア!!」

私の砲撃をイナしたカルムはすぐさまグラビモスへと攻撃。

クイツクリロードから叩きつけ。そして、凄まじい威力の爆風がグラビモスを襲つた。

頭部の甲殻が弾け飛び、グラビモスは動かなくなる。

アイツが今回担いでいるのはアカムガンランス。たしか砲撃タイプは通常型LV5だから、フルバーストの威力は眼を見張るものがあるけど……最後を持つていかれたのは少々癪だ。

「あつ……終わつた…。」

「……で？どうしてアンタはそんなに機嫌がいいのよ？」

「フツフツフツ…：聞きたいかね？」

「いいだろう、本来なら高級お食事券3枚で手を打つところだが俺とお前の仲だ。タダで教えて…」

「ああ、じやあ別にいいわ。どうせ口クなことでもないでしょうし…」

「あつ、ごめんなさい。聞いてくれたら嬉しいです」

最初から言いなさいよ…。

「……で？何があつたのよ？」

「フハハハハ！聞いて驚け！なんとだな…。」

作者がメインで書いていた作品が遂に完結したのd

「ごめん、ちょっと待つて」

待て待て。確かに前回は私もメタいことを喋つたけれど、今回もそんなノリか？

流石に勘弁願いたい。そういう発言してると、この作品の趣旨であるアカム武器が二の次になつてしまふことをコイツは理解しているのだろうか。

「長かった……！」

感想の数とかだとこつちの方が上だし、アカム武器とか10種類しかないんだからパツと書いて終わらせろよとか思つてたけど、遂にこの話も終わりが見えて  
「待つて！ホント待つて！」

ヤバい、このままだと收拾つかなくなる。

確かにこつちの方の更新に力が入るようになるのは嬉しいけれども、それをこうも露骨にアピールするのはいかがなものだろう？

どうすればこの暴走を止められる……！？

「活動報告見たか？」

俺とウルスつて、あの冴えない操虫棍使いよりハンターとしての力量は上っぽいぞ？いやあ～アカム武器みたいなキワモノ使いがそんないい身分についていいもんだろう

「お願ひ！ちよつと黙れ！」

ヤバいヤバいヤバい……どうする!?  
一体どうやつてコイツを止めれば……!?

なんて私が焦つていると……。

高笑いしているカルムを、宝纏が転がり攻撃で吹き飛ばしていつた。  
正直ビックリした。だつていきなり来るんだもの。反応ができなかつた。

「ぶれあああああ!?

おいゴラア!?てめえ俺が話してる途中だろうがよオ!  
おーし、わかつた。てめーもアカム銃槍のフルバーストで燃え尽きやがれゴラアア  
!!」

咆哮をあげる宝纏に向かって啖呵を切るカルム。転がり攻撃を喰らつたのなんてなんのその。元気いっぱいに宝纏へと突っ込んでいった。

うん、なんとか乗り切つた。

メタい話は対応に困るので、正直勘弁して欲しいのだ。

「あつふう……。ウルスさあん!? 睡眠ガスを喰らいそうだから助けて欲しいな〜〜!?  
なんて思つて、ぶふつ…」

おつと、いつのまにか突つ立つてしまつてたみたい。カルムが私に助けを求めてきた。

どうやら睡眠ガスを喰らつたようで地面に突つ伏している。

「つと、ほんやりしてゐる場合じやないわね……。私だつて戦わないと……」

突つ伏してゐるカルムへ駆け寄つて抜刀。

私が担いでいるのは、『ウイルギガンキヤノン』

矛碎の素材を使つた、凄まじい物理火力と高い砲撃性能を両立させた逸品。ただ、ア  
イツの武器程ではないけど斬れ味には少々難があるガンランス。  
即座に砲撃へ繋げ、カルムを吹つ飛ばす。少々手荒だけど……まあ丁度いいだろう。

「おふつ……ナイスウウ!!」

ほら、やつぱりこれくらいで丁度いい。

宝纏は頭を大きく振り上げる。そこへ私はバツクステップで近づく。

宝纏はそのまま顎を地面に叩きつける。発生する振動をクイッククリロードのガード  
ポイントでガード。そして叩きつけ、フルバーストへと繋げる。

狙うは前脚。

クソ肉質と名高い宝纏の中では比較的柔らかい部位。そこへ斬撃を叩き込む。  
続けて、銃槍から青い爆炎が迸つた。

カルムも通常型LV5のガンランスだけど、こつちだつて通常型LV5。ブレイヴフルバーストの威力なら負けてない。

凄まじい勢いの爆炎を浴びた宝纏は堪らず怯んだ。

「怯んだなクソ肉質野郎！」

見てな！今からブレイヴフルバからのブレイヴ竜撃砲をかましてやるぜいくぜいくぜおおおおおああああああああF00000000!!!」

……………宝纏を挟んだ向こう側では謎テンションのアホが爆炎の爆ぜる中で絶叫していた。

以前も似たようなことがあつたのだけど、聞いたところによると

『アカム武器のロマン×ガンランスのロマン』

が成せる御業らしい。まあ野郎の考えることはよくわからない。

と、まあそんなこんなでチクチクバンバンしていたら宝纏は5分もしないうちに脚を引きずり始めた。なかなか順調だ。

「なんか随分あつさり終わりそうだな。

もうちよい歯応えあるもんだと思つてたけど…」

「別にいいでしょ。早く終わつて悪いことなんてないわ？ 宝纏と延々と戦うなんてごめんだし…地底火山の地形はストレス溜まるし…」

「まあそんなもんか！うし、ちゃつちやと終わらせよう！」

カルムの一言と同時に、アカム銃槍の放熱板が格納された。

……うん、これは宝纏が寝てるところに龍撃砲ぶつぱフイニッショんだろうなあ。ものすごくワクワクした顔をしながら走るカルムを見ながら、そんなことを思つた。



「ねえ、聞いた？ ルファールのパーティ、なんかギルドの方から推薦かなんか来たみたいよ？なんか…新しい大陸の調査？みたいな…」

「ふーん。どうでもいいや。アカムトルムがいないなら行きたくもないな」

なんだ……反応悪いなあ……。

ちよつとくらいアカム以外のことには耳を傾けたっていいだろうに…。  
達人ビールをちよびちよびと飲みながらそんなことを考える。

「……そりゃあ、最近アカムトルムの依頼とかないわね」

「そりゃあ、最近アカムトルムの依頼とかないわね」

もう宝纏とグラビモスはウンザリだ！」

たしかに宝纏にはウンザリしてきている。

肉質もクソだし、地形もクソだし…。

あんまり戦いたくないのだけれど、酒場のマスターはどうも私達に宝纏のクエストばかり回してきている気がする…。正直やめて欲しいなあ。

なんてことを思つていた時だつた。

「ハローーお二人さん。宝纏2頭とグラビモスの狩猟お見事だつたわ、お疲れ様。

これは私からの奢りよ？」

宝纏のクエストを出してくる元凶、酒場のマスターが登場。その手にはサイコロミートらしき、いい匂いを漂わせるステーキの皿があつた。

「肉！マジですか！？それじゃあいただくぜ！」

「ふふつ、遠慮なく食べて？

で、食べながらでいいのだけれど、何個か話したいことがあつてね…。

ウルスちゃん、聞いてくれるかしら?」

「えつ、あ、はい」

私もお肉欲しかつた……。

まあしようがない。ちょっと重要そうな話だし……。

「ウルスちゃんなら、彼女達…。『英雄』パーティが新大陸に行くことになつたって知つてるでしょ?」

「ええ、ルフアールから聞きました。

それがどうかしたんですか?」

「それに、貴方達2人はどうかしら? つて思つてるんだけど…」

……推薦、か。

新大陸つてことは、今まで見たことのないモンスターもいるんだろう。

それらを相手取れるようになるなら、ハンターとして是非とも受けたい話だ。

……だけど。

私は、此方の話になんて全く耳を貸さずに夢中で肉を頬張っているカルムを見た。

「ルフアールから聞いたんですよ。

聞いたところによると、新大陸の方ではアイツの好きな相手……『霸龍』は確認されてないんですよね？

そうなら、アイツは行かないっていうと思います。で、そうなつたら私もその話はお断りさせてもらおうかな……なんて思つてます」

私はハツキリと酒場のマスターに言つた。

なんだかんだで私はまだアイツと組んでいたい。

正直うるさいし大変な時もあるけれど、それ以上に楽しいから。  
だからハツキリ言つた。

マスターはそれを聞くと…微笑んだ。

「そう……。まあ、なんとなく予想はしてたわ。

あまり期待しないで聞いたものだから、気にしないで？貴方達は2人がお似合いだものね

「お、お似合いつて……」

「ええ、とつてもお似合いよ？」

思わず顔を伏せてしまう。カルムに聞かれたり見られてないのが幸いだ。

「それじゃ、このことについては終わりにしましよう。

で、もう一つ相談……というか、依頼があるのでけれどね……？」

マスターは少し深刻そうな顔に。

こんなマスターの顔を見る機会はなかなかない気がする。そんなに厄介な依頼なのだろうか？

「溶岩島にちょっと手のかかるアカムトルムが現れたのよ…」

## 第12話 横行霸道

『得意なモンスター』というのは、それなりのレベルのハンターなら1匹や2匹いることだろう。

自分の武器、スタイル、戦い方が力チリと噛み合う相手。そんなのが大抵1匹はいる。

私の場合、それに当てはまるのは『ウカムルバス』

それまでは無敗でハンター街道を突き進んでいた私が初めて敗北を喫した相手。

初めて負けた相手は自分にとつて、いつの間にか特別な存在となるらしい。

『もう絶対に負けない』『そつちの攻撃は喰らわない』なんて考えて相手をする内に、戦うのが少し楽しくなっていた。

いつのまにか私は『雪姫』なんていう大層な通り名で呼ばれ、ウカムルバスの相手なら右に出るものは無いなんて呼ばれるようになつた。

他のハンターにとつては十二分に危険な相手だけど、私にとつては楽しい相手。ウカムルバスは私の『得意なモンスター』となつていた。

そして、あのアホにも『得意なモンスター』というものはある。得意になつた理由を聞いたら、どこか私に似ていてイラツとした。と、まあアイツも同じような感じで『霸王』だなんて大層な通り名を持つようになつた。

……ただ『得意なモンスター』にも例外はある。

偶にだけど、普通だと考えにくいような強さを誇る個体が現れたりする。

フネスを持つ個体。

G級の最前線での使用に耐えうる防具を以つてしても、一撃でハンターをベースキャンプ送りにし得るような圧倒的攻撃力の個体。

そして……。



何があつたのかは知らないけど、常に怒り状態の個体なんかもいたりする。

「……ッ！ 粉塵ありがとッ！」

「来るぞ！」

いつもみたいに無駄口を叩いてる余裕がない。  
すぐさま私とカルムはその場から離脱。間髪入れずに、赤黒い巨体がその場を凄い勢  
いで走り去った。

身に纏つた防具からはシユウ、と白い煙が上がり、悲鳴を上げている。  
……ちよつとヤバいかもね。

「なあ。勝てる見込みとかついてる？」

「……全く」

「あーチクショウ！ 心強い返答ありがとよッ！」

珍しく少し弱気なカルム。身に纏つた防具からは、私と同じく白い煙が上がっている。

酒場のマスターから依頼されたアカムトルムの狩猟。

通常より遙かに強力で異常な個体だつてのは聞いてたけど、まさかこんなにヤバいやつだとは思つてなかつた。

あらゆる攻撃が重い。回復なしなら2発程貰えば即ネコタクだろう。

体力だつていつものアカムとは比べ物にならない。かれこれ40分近く戦つているけど、全く倒れる気配がない。

また、何故か常に怒り状態となつてゐるらしく、酸性の唾液が私達の防具の防御力を著しく下げる。そうなつたら、もともと重い攻撃がさらに重く…それこそ一撃でBC送りレベルに。

長期戦となつてゐるから、忍耐の種も切れてしまつた。

そして…なぜか溶岩の噴出が尋常じやない頻度で行われる。アカムトルムに溶岩を操つたりする能力は無いはずなんだけれど…。

「クソ…また潜りやがった！ 場所は……あっちだ！ 走るぞ！」  
「また遠くに…！ 溶岩の噴出だつてバカにならないのに…！」

潜つたアカムトルムを地響きの音を頼りに追う。

地面からの溶岩噴出に気をつけながら、走り続ける。

既に私達は2回力尽きてる。あと1回でも力尽きたらクエスト失敗。それだけはなんとしてでも避けたい。

「あそこだ！ 顔面にブチ込むぞ！」

カルムの指差した先では、アカムトルムが地面から現れていた。

走れば頭に一撃入れれそうな距離。牙も一本は碎け、残りの片方もヒビが入つてている  
ように見える。

「溜め斬りいくわ！ 合わせて！」

「あいよ！」

アカムトルムの頭部へと近づく私達。

溜め斬りを1発ブチ込むだけの余裕はありそうだ。

カルムはアカム大剣を腰だめに構えて力を込める。私も同じように体を捻りつつ、ア  
トルル・力の大剣を握る手に力を込める。

「1：2の…さつ、えつ!?」

「ふあつ!?

力を溜めきり、いざ解放…しようとした瞬間、足下から溶岩が勢いよく噴出された。  
私とカルムは仲良く空中へと打ち上げられる。

……ヤバい。

……ヤバいやばい！

アカムトルムは今、地面から現れた。

これは、ある大技を放つ前の前兆。

溜め斬りを当てて怯ませるはずだったのが、溶岩噴出のせいでおじやんとなつてしま

まつた。

頭から地面に打ち付けられる私とカルム。  
すぐには体勢を立て直すことができない。

「うつ……くあ……」

「がふつ……」

なんとか体勢を立て直す。早く回避の準備をしなきや……！

「ソニックブラスト来るわ！早く！」

カルムにそう一言かけ、再びアカムトルムの方を見る。

アカムトルムは大口を開け、既に私達に狙いを定めていた。

「あ……」

世界が少しずつ歪み始め、アカムトルムが溜めた力を解放する。

「…………クソツ！」

次の瞬間、世界が振動と圧力に包まれる。

驚異的な威力を持つた音波を喰らいながらも理解出来たのは、私の体と意識があまりにあつけなく吹き飛ばされたこと。

それと、カルムが私を守るように掴んでいてくれたことだけだった。



「お疲れ様。まあ…今日は相手が悪かつたと思つて？　こつちで出来るだけ対処はして  
みるから」

「……すみません」

「大丈夫よ、謝らないの」

クエストを失敗したというのに私を労ってくれる酒場のマスター。

そんなマスターに一言謝罪を述べ、私は酒場を後にした。

カルムは先に自分のマイハウスへと戻つている。私より疲れたらしい。まあ…最後

とか庇つてくれたし…。

クエスト失敗とか、いつ以来だろう…。

ここ最近は失敗とは無縁だったから、かなりショックを受けていると自分でもわか

る。

「ハア…。私も帰ろう…」

切り替えないといけないのはわかっている。

だけど、どうにもそんな気分にはなれない。

帰つたらまず眠ろう、と考えながら、トボトボと歩く私だった。

「おっ、帰つたか。久々のクエスト失敗はどうだった?」

「いや……なんでいるのよ……」

肩を落としながらもなんとかマイハウスへと到着した。

だけど、ドアを開けるとそこには見知った顔のハンター・ルファールがいた。長い銀髪をたなびかせ、身に纏うのは暗めの銀色に輝く防具。たしか：最近各地に現れるようになつたバルファルクとかいう古龍の防具らしい。たぶん外装だけそれにしているんだろうけど…。

「なんでつて言われてもなあ…。 偶然龍識船を訪れたら、マスターからお前達がク工スト失敗したと聞いてさ。 慰めに来てあげたつてわけだ」

「……自分のパーティはどうしたのよ」

「先に帰つてもらつた。 なに、私とお前達のことならわかつてくれてるさ」

「……そう」

椅子に座つていたルファールの前を素通りし、ベッドへと飛び込む。氣を使つてくれているのか、私に声はかけないでいてくれた。

「……アンタ達にちょっと助太刀頼むかもしれないわ、ちょっと悔しいけれど」

「気にするなよ。あのクソ師匠も言つてたろう？困つたら協力するのが一番手つ取り早いさ。

麻痺ガンでも閃光ファイバーでもなんでも任せとけ！」

「流石にそういうのは嫌だけど…」

麻痺ガンはちよつと勘弁願いたい…。アレはハンターとしての腕が鈍る。

以前やつてもらつた時はまあ…楽なのだけど釈然としない部分も多かつた。カルムもちよつと不機嫌な様子だつたし。

「それに…そろそろウチの操虫棍使いも紹介したいと思ってたところさ。彼ならガチンコバトルでも相当な腕があるし、力になってくれると思うよ？」

「まあ…期待しておくわ。ごめん、今日は疲れたから寝ることにする

「うん、ゆっくり休め。次のクエストでは呼んでくれるのを期待してるよ～」

軽口を叩きながらルファールは出て行つた。

……今回ばかりは力を貸してもらうしかなさそうだ。流石にあのアカムを2人だけで相手にするのはしんどい。

……操虫棍使いか。どんな人なんだろう。案外冴えない感じだつたりして。  
くだらない考え方をしながら、私はベッドの上で目を閉じた。

# 第13話 霸を見てせざるは浪漫無きなり

「だああああああつしゃあああああああい！」

リベンジじやオラアアアアアアアアアアアアアア……」

よし、話の通じないバカは落ちてつた。これで話の通じる3人で話せる。

今、私達がいるのは溶岩島のベースキャンプ。

この間負けてしまつたブチギレアカムトルムのリベンジということで、助つ人を2人お願いした。

1人はまあ、私やカルムとも馴染みのあるルファール。携えているのはスキュラ弓。

當時怒り状態のモンスターが相手ということでスキルをそれ用のモノにしたらしいけど：彼女はまあ、そっちがモンスターだろというレベルに強いので問題ないだろう。

そして、もう1人なのだけど……。

「な、なんか降りて行つちやいましたよ？大丈夫なんですかアレ？」

「ん？ああ…大丈夫だろ。いつもあんなんだし。何だかんだでピンピンしてるさ」

どうにも頼りにならなさそうな顔の操虫棍使いのハンターにルファールが答える。  
聞いたところだとこの子がルファールのパーティの新しい一員らしいけれど、なんとも冴えない感じの雰囲気を醸し出している。

携えてているのはハイアーザントップ。まあ操虫棍は手数も多くて乗りもしやすい武器だからいいんじゃないのだろうか？  
ただ…。

「えと…ナギ君でいいのかしら？貴方、スタイルは何にしているのだっけ？」

「あっ、ブレイヴスタイルですね」

なんやねん、ブレイヴ操虫棍つて。

アレって全然ジャンプも出来ないスタイルだった記憶があるんだけど。いいから乗れよ。

今回のパーティの武器構成はカルムがチャ акту、私が大剣、ルファールが弓、そして目の前のこの子が操虫棍。

私の理想としてはこの子がガンガン乗って、その隙に私達で攻撃を叩き込むのがいいのだけど…。

「…………ちょっとルフアール、こつち来て。あつ、そつちの子はいいから」

「…………どうした？」

小声でルフアールを呼び寄せる。

ナギ君とやらには聞こえないようく小声で喋りたいところ。

「…………あの子、本当に大丈夫？」

私としては、あの…レイリスちゃんとかクルルナちゃんとか…。その辺りを連れてきて欲しかったんだけど…。

何よアレ？失礼だけどすつござい弱そうじやない。しかもブレイヴ操虫棍つて…。  
聞いたこともないマイナー武器なんだけど？」

「ひ、ひどい言い草だなあ…。

大丈夫だつて、彼はレイリス並みのハンターさ。集中したら私より凄いし」

「…………いまいち信じられないのだけど」

ルファールより上とかいうのはとてもじゃないが信じられない。

そもそも私の知りうる限り、ルファールより強いハンターなんて聞いたこともない。そんなルファールよりも、あの冴えない顔をした操虫棍使いの方が技量があるとは思えなかつた。

「まあ一回見ればわかるつて。今回は強敵なんだろう？ なら、彼も相当いい動きをするはずさ。

それに…そろそろカルムも1人だとしんどいんじやないか？」

「ハア…。じゃあ貴女を信じることにするわ？」

まあ、最悪3人でもなんとかなりそうだし…」

「まあ騙されたと思って彼を連れて行つてくれよ。悪いようにはならないさ」

うーん…まだ納得しきれないところはあるけれど…。まあいいのだろうか。

最悪ナギ君のハンデを背負ついても、他3人でなんとかなるような気はしている。

……しようがないか。

「よし、それじゃあ今日は安全に立ち回る意識を強く持つて。頑張りましょう」

「ああ、行こうか」

「わかりましたー」

イマイチ気合の入らない返事を返してくれたナギ君。

やつぱり不安だ…。

煮え切らない気持ちを抑えながら、私は溶岩島のベースキャンプから飛び降りた。



「おっし！ 麻痺入りそうです！」

「ナイスだヘナチヨコ！」

狩獵が始まつて15分が経過、もう20分に差しかかろうという時間だろうか。

今のところ、誰も力尽きてはいない。前回よりはマシ……というか、予想以上に楽に進んでいる。

「麻痺の後に睡眠入れる！ 剣撃工エネルギー貯めとけ！」  
「おうよ！」

もちろん、ルフアールがいるのは大きい。初っ端から毒ビンでアカムを毒状態にし、そこからはブレイヴ弓特有の剛連射をバシバシ叩き込んでいた。腕が赤く光っているので挑戦者も発動しているらしく、まあアホみたいなダメージをアカムに与えているだろう。

ただ：ハンターが大きなダメージを出すだけでは、ここまで快適にはならない。そう、今回の狩猟はとても快適に行えていた。

相手はアカムトルム。しかも超強化されている個体。

ルフアールがいただけではここまで快適に狩猟を行えてはいなかつただろう。なぜここまで快適なのかというと：まあ……。

「よーし、寝ましたね。皆さん、爆弾は残つてますか？」

……この操虫棍使いのおかげなのだろう。

今回の狩猟で、彼は既に2回の乗りと3回の麻痺を奪っている。

2回の乗りはまだわかる…といいたいところだけど、彼は今回ブレイヴスタイル。乗りにはさっぱり適していないスタイルで、2回も乗ったのには驚かされた。

そして、もつとヤバいのが3回の麻痺を奪つたこと。

いや：手数多すぎでしょ。しかも全然攻撃を喰らつていらないみたいだし…。

拘束時間が長いお陰で、前回はあんなに鬱陶しかつた溶岩噴出も全然発生していない。

私が今回装備しているのはブラックX一式だから、W抜刀術が発動しているので、アカムチャアクのカルムと一緒に一回はスタンを奪つた。ただ、操虫棍使いのナギ君に比べれば特筆すべきほどの活躍ではない。

ダメージを出しているのは私たち三人だけど、彼がいないならここまでダメージは出せていないだろう。

「じゃ、カルムさん、お願ひしまーす！」

「あいさあ！俺の最終奥義を見せたらあ…！」

ブレイヴ☆オーバーリミット超高出力属性開放斬りいいいアアアアア!!」

しこたま騒がしい掛け声とともに、アカムトルムの頭部が大爆発に呑み込まれる。今回はナギ君がサポートに徹してくれると聞いていたので、カルムもひたすらに口マシを追い求めた装備にしたらしい。なんでも、超高出力属性開放斬りを連発するための

装備らしい。おかげで、狩場には度々爆風が吹き荒れていた。

大爆発がやんだ後、アカムトルムは二回目のスタンに入つたらしく、もがいていた。爆発があつたから、頭へ近づくのが遅れてしまつたけど、抜刀溜め→薙ぎ払いのコンボは入つた。カルムも剣撃エネルギーをしつかり溜め終わつたらしい。

さて……あと少しだとは思う。

いくら強化個体だからといって、G級の最前線を往く四人で20分以上攻撃し続けているのだから、もう一押しなはず。頑張ろう。

「乗れるか……な？　つと、乗りました！」

……一押しやはいつた。これはもう勝つた気がするなあ。

ナギ君は全く危なげを感じさせず、アカムから乗りダウンを奪う。ダウンと同時にアカムの頭部へ駆け出す私達。

「これ以上長引くと面倒だ！決めろ！」

ルフアールが矢を番えながら叫ぶ。いわれなくともそのつもり。

ダウンしたアカムの目の前で、大剣を腰だめに構える。

そして、最も力が込められるタイミングで一気に開放。全力で振りぬく。

会心の手ごたえが伝わってくるけど、まだ終わらない。

左足を回転の軸にして、渾身の力でもう一度振りぬく。ガツンとした手ごたえを再び感じた。

よし…これでそろそろ…。

「ウルスさああん！ 吹っ飛ばしたらごめんなさああい！！」

「えつ…？ はつ？ ちよつ!?」

……後ろから、カルムが超高出力属性開放斬りをぶちかましてきた。

榴弾ビンの凄まじい大爆発に巻き込まれ、吹っ飛ばされる私。それがアカムの頭部に吸い込まれたと同時に、アカムの身体はゆっくりと地面に倒れ伏した。

「おっしゃあー・ラスト頂きイ！」

私のことなど気にする様子もなく、そんなことをぬけぬけと言い放つカルム。そんな私達を、ルファールとナギ君は引き攣った顔で見ていた。

「さうて、狩りの後のお楽しみ！剥ぎ取りタイムといきますかア！」  
「ほれ、そこの2人も変な顔してないで剥ぎ取れよ？」

……私を吹っ飛ばしたことなどまるで眼中になかつたかのようなセリフを放つカルム。

よし、キレた。

なんとか満面の笑みを顔に浮かべながら、ツカツカとカルムに歩み寄る。2人が青ざめているけどまあ気にしない。

「おい、脳みそ鈍器野郎。歯ア食いしばれ」  
「ん？・ウルス？随分とドスの効いた声に：」

刹那、私の右ストレートが煌めく様な速さでカルムの顔面にぶち込まれた。  
カルムの首からはゴギンツ、というちよつとアレな音がして、3メートルは吹っ飛ん

だ。まあ…向こうでピクピクしてるから死んではいないだろう。

うん、いいパンチだった。今の私ならブラキデイオスにも殴り勝てそう。怒りは人を強くする。

「さて、剥ぎ取つて帰りましようか」

「あ、ああ…。いいパンチだったぞ…」

「お、お疲れ様でした…」

一連の出来事を見ていた2人はかなり顔が引きつっているが、気にしないで欲しい。アソツが悪いんだ。

そんなこんなで、アカムトルム強化個体の討伐は、強力な助つ人2人の力もあつて無事に終了した。

ちなみに、カルムは顎が外れ、首もイソていたらしく、しばらくはマイハウスで寝つきりの生活を余儀なくしたらしい。

ざまあみろ。

# 昔話（1）

「しかし何度見ても…奴が住んでいるにしては、随分と質素な作りに思えてしまうの。らしいといえばそれまでなのじゃが…」

村のはずれに位置する場所に建つてはいる、何の変哲もない質素な家。その玄関先に佇む竜人族の老人が言葉を落とす。

この老人、かつては伝説的な活躍をしたハンターであり、彼がモンスターを狩ることを生業としたことが現在のハンター業の始まりと言われている。つまり、この老人はハンター業の祖といつた存在だ。

ハンター業を引退してからは、後世のハンター達の拠り所を作りたいと考えこのココット村を興した。村人たちの協力もあり、今ではアイルーが営むキッチンやハンター業に役立つ資源を育てる農場、ハンターズギルドが管理・運営する集会所もある。新世代の狩人を養成する訓練所も設置され、見事にハンターが集う村としての役割を果たしている。

そんなココット村の村長を務めているこの老人だが、今日はある理由からこの家を訪れていた。



「おう、お邪魔するぞい」

既に家主とは旧知の仲である。村長は家の 中へ躊躇なく足を踏み入れた。中には衣類を畳んでいる最中の麗しい女性が一人だけ。村長に気づき、口を開いた。

「あら、珍しい。ちょっと待つてて、今お茶でも…」

「いや、手短に済ませるから気にせんでいい。旦那はどうしておる？」

「ん~、寝てる…かな? 寝てたら村長からもビシーツと言つてやつてください、もうすぐお昼だぞーって」「相変わらずだの…」

軽く言葉を交わしながら、部屋を見渡す村長。そして溜息を吐いた。

「やはり、この勲章は凄まじいの…。何度見ても圧倒されるわい」

「そうですか？そろそろ慣れるころだと思つたけど」

「あれが2つ並んでいるなんぞ、いつまで経つても慣れまいよ」

ハンターの祖であるからこそ、かつて『英雄』と謳われた村長だからこそ、気づくことの出来る勲章がそこにはある。

### 『天地狩獵ノ霸紋』

並ぶものが無いほどの高みに到達した狩人のみに贈られるという、黒い龍の彫刻が施された勲章。この広い世界を見渡してみても、この勲章を得た狩人は10人にさえ満たない。下手をしたら、5人いるかすらも怪しい。

そんな勲章が一か所に2つ並んでいる。ハンターの世界を深く知っている村長だからこそ、この光景にはいつまで経つても慣れることは出来ない。

「さて…ちよいと話をつけてくる。オヌシには関係のない話…というわけではないのだが、くるかの？」

「いえ、ひとまずウチのに言つてみてください。結局彼次第ですかね？」

「旦那次第か…。夫婦仲はどうなのだ？」

「まあぼちぼち楽しんですね。時々ちょっとした喧嘩とかありますけど…」

「それくらいで丁度良い。いまのオヌシはいい表情をしているからの」

「あら、嬉しいこと言つてくれますね」

少し言葉を交えた後、村長は本題に入る。

「では話をつけてくる。なに、家庭の時間を奪うような頼みではないからの」

女性が畳んでいる子供用の衣服を目に入れつつ、言葉を落とす。旦那が寝ているであろう家の二階へ、足を運ぶ村長だった。



「この部屋にしても、相変わらずとんでもない…」

先ほどに続いて、またしても溜息を吐きながら村長は部屋を見渡す。目に入つてくるのは数々の武具であつた。

角竜系のモンスターの角を削り出して作られたのであろう大剣。砂漠に棲息する牙獣素材を用いたらしいハンマー。山の如き巨大龍の素材を使つたと思しきヘビイボウガンや弓。素材の主だつたモンスターの、怒髪天を衝く怒りが伝わつてくるような金色の鎧。

中には目を逸らしたくなるほどに禍々しい雰囲気を醸し出す、暗黒や深紅、純白色の武具もあつた。

村長はこの場にいるだけで緊張する。だというのに、そんな中で呑気に寝息を立てる男がいた。

「おい、ツジ。用があつて邪魔しておるぞ」

寝息を立てる男に声をかける村長。決して大きくはない声であつたが、その一声で男は目を覚ました。

「んあ…、えつ、村長じゃないですか。こんな朝早くにどうしたんです？」

「なにが朝早くか：昼まで起きてこないとオヌシの女房が小言をこぼしておるわい」「あ～もうそんな時間か：。まあ勘弁してください。ハハ：」

寝ぼけ眼で喋るツジを横目に見る村長。黒髪もボサボサの状態で、威厳なんてものは微塵も感じられない。だが、この部屋に置かれている屈強な武具は全てこの男が自らの力で作成したものだ。

つまり、このツジという男も、あの『天地狩獵ノ霸紋』を受け取るに相応しい実力を備えたハンターということになる。しかし、目の前にあるどこか力の抜ける光景から、そんなことが想像できるはずもない。

「さて、クレールは飯作ってくれてるかな。村長は朝飯：といふか昼飯どうします？俺は今から食べますけど」

「話があるといつておろうに…。まあいい、頂くことにするかのう」

「自分で言うのもなんですけど、アイツの料理はかなり美味いんでござ堪能あれ。なんつって」

「どの口が言えたものか：」



「で、話つてなんですか？シユレイドで何か動きがあつたりしましたか？」

「安易にその言葉を口にするな…。安心せい、モンスター相手にどうこうしてほしいと  
いう話ではないからの」

昼食を終え、ツジの自宅の庭で話を始めた二人。周りには人気もなく、ツジが口にした言葉を耳に入れることが出来る人物もいるはずがなかつた。

「預ける…？えつ、養子的な？いや、勘弁したいつす。息子のセフイで手一杯なんで」  
の

「違う違う」

若干焦った様子のツジに村長が続ける。

「預けたいのは、ハンター見習いの少年少女達なのだ。三人がすでにこの村に滞在しておる」

「いや…そういうのは訓練所の仕事でしょ。面倒なんですけど…」

「最後まで話を聞け」

面倒な様子を見せるツジに、村長はまだ言葉を続ける。

「その三人なのだが…凄まじい逸材なのだ。正直、訓練所の教官の手には余る程でな…。訓練過程で相手にできるモンスターどころか、ちょっととした飛竜程度なら相手にならんらしい」

「ほうほう」

「そこで、白羽の矢が立つたのがオヌシ達だ。なに、長期間家を空けろ等といった話ではない。オヌシ達の息子に対しても申し訳ないしの。ただ、次世代の狩人育成の為に少しづかり協力してほしい。儂の顔に免じて、承諾してもらえないだろうか？」

ツジは黙り込み、少しばかり考えた。本当に少しばかりだつた。

「わかりました。ただ、その金の卵達と会つてみないことには始まらないです。今からそいつ等と会うことつてできますかね？」

ほぼ即答といえる返事に、村長はニヤリと笑つた。

「オヌシならそういうと思つていた。安心せい、その者達ならすぐ近くに待機させておるよ」



「で、あそこで息子と戯れるのがそうなんですかね？」

「う、うむ。オヌシの息子もなかなかの器量がありそうだの…」

ハンター見習い達が待機している場所へやつてきたツジと村長の目に入ってきたのは、追いかけっこをしている少年少女達の姿だつた。

追いかけっこといつてもなかなか異様な光景であり、四つん這いになつて獣のようにそこいらを駆け回る少年。その背中に特に幼い男児が乗つていた。そして、それから逃げる二人の少女。なかなかのインパクトだつた。

「あつ、とーさん！みてみてー！ケルビゴつこしてゐるんだー！ひとをあごでうごかすのつてたのしいんだね！」

「おー、それはいいな。その年にして人の上に立つ悦びを知つてしまつたか息子よ。お前は将来有望だ」

父親と嬉しそうにお喋りをする男児。その横では三人の少年少女達がぜえぜえと息をあげていた。

「な、なんなんだこのクソガキ：」

黒髪の少年と銀髪の少女が口を揃えて呟く。瞬間、ツジはその二人の頭を儂掴みにし

た。

「おい、お前ら。人様の可愛い息子に向かつてクソガキ呼ばわりはあんまりじやないか？よーし、セフィ。この兄ちゃんはお前から見てどうだつた？」

「うーん。かんがえることができないおばかってかんじ！」

屈託ない笑顔で容赦のない言葉を放つセフィ君。それを聞いた少年はカンカンに起こり叫んだ。

「いで、いでで…。ふつ、ふざけんじやねー！お前がケルビごっこしたいとかいうからつきあつてやつたんじやねーか！そしたら、そのステップはケルビじやないだの抜かしやがつて！」

それに続けて銀髪の少女も叫ぶ。

「そうだそだ！・拳句の果てに『今からキリンね』とかいつて私達に攻撃を始めたじやないか！」

「あつ、このおねえちゃんはざんねんなひとつてかんじだつたよ。おかあさんがよくいってる『けつこんできないおんな』つてかんじー。おっぱいおおきいけど、あせくさ

かつたし…」

「はああああああ?!おぼえてろよ!?このクソガキ!」

ギヤー・ギヤーと騒ぐ少年少女の頭を掴みながら、二人を観察するような目で見るツジ。そして、すぐに頭から手を離した。

「あ…ありがとうございます?」

「よし。こんなもんだろ。しつかりお礼を言えるのは偉いぞ君たち。

それじゃあセフイ、俺はこの未来ある若者たちと話をしていくから村長と家に帰つなさい。いいね?」

「はーい!」

父親からの指示をまぶしい笑顔で返すセフイ君。

「そんじや村長。この件は前向きに検討するんでセフイお願ひします  
「うむ、期待しておるぞ」

軽くやり取りをした後、二人は自宅へと戻つていつた。

「うし…じやあ自己紹介といこうか」



自己紹介つっても…とりあえず自分からか。

「ではまず俺からいこう。俺の名前はツジ。今はあんまり活動してないけどハンターだ。ハンターとして、お前たちにハンターとしての力を養わせるくらいの力はあると思つてる。あと、結婚もしている。そこの少女達には悪いが、先生と生徒の禁断の恋なんて展開はありえないと思つておいてくれ」

「そんなもんあるか！」

少女二人が鋭く返す。うん、元気がよさそうで何よりだ。

「まあ今のは冗談だ。というかそんなことあつたら嫁に消されるからな。では、次に君たちから自己紹介をしてもらおう。とりあえず名前だけで構わない。ではそちらのケルビボーイから順にいくか」

「誰がケルビボーイじゃ！」

いやあ、若いつていいね。元気と氣力に満ち溢れている。

「つたく…。俺の名前はカルムだ！ いざれ世界中のモンスターを制する男だからな！ 覚えとけ！」

いいね、それくらいの気概があるなら教えがいもあるつてもんだ。よし、次。

「私はルファール。強くなれると教えられてここに来た。さつきのはまだ若干根に持つてるけど…。まあよろしく頼む」

うん、よろしくね。俺の指導があればその期待には応えられると思うから。はい、ラスト。

「えっと、ウルスと言います。ちょっと二人の影に隠れがちだけど…精一杯頑張るのでよろしくお願ひします」

この子が一番常識ありそうだなあ。三人ともキャラが濃いと大変だし、これはありがたい。

「よーし。それじゃあ、本格的な指導は明日以降にする。いきなりで悪いがそれくらいは我慢してくれ。

自分で言うのもなんだが、俺の指導はかなり風変わりだ。まるで住んでいた世界が違うように感じてしまうかもしれない。

だから三人には今までの常識を捨てて臨んでもらいたい。君たちのハンターライフの糧になることは保証するよ。

それでは…カルム！ルファール！ウルス！明日からよろしくな

「「「よろしくお願ひします!!」」

うん、いい返事。いやあ、この3人にはかなり期待できる。

思いがけない出来事だつたけど、これから楽しくなりそうだ。